

# 豊見城市史 だより

第12号



2015

豊見城市教育委員会 文化課

## 表紙写真説明

米海軍撮影の瀬長島(1945年 撮影)

島の南東上空より撮影された瀬長島。

現在の野球場にあたる一带に、集落と農地  
が広がっているようすが確認できる。

【沖縄県公文書館 所蔵】

## はじめに

豊見城市史（村史）編集事業は1993年（平成5）に始まり、これまでに文献資料編1998年（平成10）、とみぐすく写真帳1998年（平成10）、戦争編2001年（平成13）、民俗編2008年（平成20）、新聞集成編2010年（平成22）を随時発刊して参りました。

また、市史（村史）本誌に掲載出来なかった数々の記録を「市史（村史）だより」として手掛けて参りました。

「市史（村史）だより」は、1995年（平成7）の創刊号を皮切りに第7号まで「村史だより」として刊行し、2005年（平成17）の第8号から「市史だより」と名称を改め、今回で第12号の発刊となります。

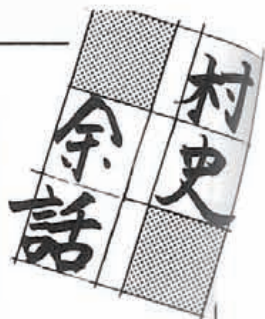
今回発刊する第12号では、これまで「広報とみぐすく」において市民に情報発信を続けてきました連載記事「村史余話・市史余話」を収録致しました。その数、1993年（平成5）6月号～2004年（平成16）8月号までの全60編となります。これまで広報の一記事として市民に情報提供してきた「村史余話・市史余話」は、「家庭の火之神」や「ハーリーの由来」、「各字にあった慰霊塔」や「戦後のクリスマスについて」等、広範な分野にわたる内容でありました。一度きりの記事ではなく、これからも多くの市民に豊見城市の歴史に関する資料として活用いただけるよう、一冊にまとめる事となりました。

『豊見城市史だより 第12号』が市民の皆様には豊見城市を深く知っていただける材料になれば幸いです。

豊見城市教育委員会  
生涯学習部 文化課

# 目次

記事名	掲載年月	ページ	記事名	掲載年月	ページ
組踊「未生の縁」の台本発見！（`豊見城、が題材）	1993年6月号	1	綱引きで豊年祈願 娯楽でなく神事の色濃い綱引き	1997年8月号	31
一五五九年辞令書 `間切地頭の大嶺里主へ、	1993年7月号	2	豊見城村の“馬力”	1997年9月号	32
恋の氏神がおわす島 一琉歌にみえる瀬長島一	1993年8月号	3	「村陸上」 戦後初は与根で開催	1997年11月号	33
風水見に鑑定を依頼 `豊見城番所の移転・新築`	1993年9月号	4	豊見城村の誕生（1）「首長之印」でみる歴史	1998年3月号	35
`なんと！二百万坪の水田があった、 `廃藩置県時の豊見城`	1993年10月号	5	豊見城村の誕生（1）「首長之印」でみる歴史	1998年3月号	35
`手水の縁と豊見城、`組踊の恋愛の舞台に！`	1993年11月号	6	豊見城村の誕生（2） 初代村長は自由民権運動の旗手	1998年4月号	36
`あ`徴兵検査、「島尻郡治要覧」の記録から	1994年1月号	7	一反当たり那覇に次ぐ生産高！与根マース	1998年8月号	37
『おもろさうし』に見る豊見城	1994年2月号	8	ジョン万次郎は「甘党だった」	1999年1月号	38
『豊見城に雪が降った!』`百五十一一年前の三月某日`	1994年3月号	9	真嘉部は吠の産地だった	1999年2月号	39
ハーリーの始祖・汪応祖六百年前に漫湖で競漕	1994年4月号	10	「ピン」から「保栄茂」へ	1999年3月号	40
家譜にみる豊見城	1994年5月号	11	天皇の侍従が視察 `農業模範集落 字長堂`	1999年4月号	41
平良・田頭の移転 一七七二年と八六年に王府が許可	1994年6月号	12	瀬長島でハーリー 島民の一致団結のために	1999年5月号	42
高安村の金城、外間筑登之本部郡に製糖の秘法教える	1994年7月号	13	“迫撃砲の緊急輸送を” `海軍司令部の終末`	1999年6月号	43
「旧海軍司令壕」 `字豊見城`	1994年9月号	14	未だ特定できぬ出発日 `村内学童疎開団`	1999年8月号	44
家庭を守る『火の神（ヒヌカン）』	1994年10月号	15	“保栄茂・翁長で豊年祭” 保栄茂ではマチポーも	1999年9月号	45
昭和二十年の「北郷国民学校」学童疎開児たちの写真	1994年11月号	16	大正元年の原勝負 `一八十七年前の新聞記事から`	1999年11月号	46
地頭代など16名を確認 `二百八十年前の豊見城間切役人`	1994年12月号	17	五十五年前の慌ただしい師走	1999年12月号	47
五十年前のお正月 刻一刻と迫る米軍上陸におびえながら・・・	1995年1月号	18	時、ユタに罰金五〇銭 `一百年前の「村内法」に規定`	2000年2月号	48
二月ウマチー（麦穂祭）について	1995年2月号	19	一昭和三年の与根の塩田図面` 『塩業整備の基礎資料として作成』	2000年3月号	49
`豊見城は青龍、 蔡温、首里城の風水（フンシー）をみる	1995年5月号	20	浜下りと瀬長島	2000年4月号	50
「歩兵第二十二連隊」（山三四七四部隊） 50年の歳月が過ぎてはまだ・・・	1995年6月号	21	九千人台で推移した村人口 `「産めよ殖やせよ」の人口政策も（戦前）`	2000年5月号	51
伊良波収容所の「四月バカ」 `戦後すぐのエイプリル・フール`	1996年2月号	22	折口が瀬長島を訪問 `大正期の島の様子を記録`	2000年6月号	52
「招かざる客？」だったベッテルハイム `到来異国人のはなし`	1996年3月号	23	豊見城を訪れた高等弁務官ドナルド・ブース	2000年8月号	53
時代を担う子や孫に今、語り継ぐ 「戦時・戦後体験記」	1996年6月号	24	県下の長寿大城ノブさん 62年前の『琉球新報』から	2000年9月号	54
宜野座村の墓標に刻まれた本村関連の資料二点 !!	1996年8月号	25	疫病からムラを守る祈願 「シマー（シマクサラシ）」	2000年11月号	55
これは貴重！「村内の稲作風景」見つかる	1996年9月号	26	クリスマスあれこれ 戦後の一時期は公休日	2000年12月号	56
`糖畑、水田が充満するを・・・、 「百五年前の日誌」から	1996年10月号	27	豊見城村内を走った軌道馬車	2002年2月号	57
280年以上も前から拝まれている祠	1996年11月号	28	舟を漕ぐ農民 `王府時代の農民の意外な一面`	2002年3月号	58
規模や立地などに注目！ 豊見城グスクの重要拠点説	1996年12月号	29	海を渡った豊見城の人々 `移民・出稼ぎの調査を開始`	2004年6月号	59
各字にあった慰霊塔 不戦を誓って住民が建立	1997年6月号	30	石垣島・川原への開拓移住	2004年8月号	60



## 組踊『未生の縁』の台本 発見！（「豊見城」が題材）

保栄茂按司の娘・乙鶴と平良若按司・鶴千代を主人公にした組踊『未生の縁』の台本がこのほど八重山で発見されました。

この台本を発見したのは県立図書館史料編集室の當間一郎主幹（村史編集委員）です。當間主幹は、この台本について平成三年七月の第十六回沖縄芸能史研究発表大会で発表さらに県立図書館史料編集室紀要の第十七号でも解説を加えて台本を紹介しています。

おそらく登場人物や場所を豊見城だけに限定した組踊は「未生の縁」が唯一のものであり、村民にとっても実に嬉しい発見であると思います。

物語は全部で六段構成、一人の登場人物も全て豊見城の人達との設定であります。

あらすじは、平良按司と保栄茂按司は親友であるが二人とも子宝に恵まれず、二人はもし両家に男女が生まれたなら婚約させようと約束をした。後年、両家に子が生まれる。

保栄茂按司には娘・乙鶴が、そして平良按司には若按司・鶴千代である。しかし平良按司の妻は鶴千代誕生後の三年後に死去、平良按司は後妻を迎え次男が誕生、長男鶴千代は



「未生の縁」の台本

継母に毒をもらわれ失明し後妻の弟・饒波の比屋が両家の中に入り婚約解消を図る。

乙鶴の側は、生まれない前から親同士が決めた婚約であるから解消できぬと断る。そこで継母は、鶴千代を八重嶽の洞穴に捨て殺害させる計画をたて実行する。

保栄茂の乙鶴は、夢に観音様が現れ、「婚約者の鶴千代を洞穴から救い出せば二十日ほどで病気は治り、目も見えるようになるだろう」とのお告げを信じて鶴千代を助け出す。二人はめでたく結ばれて鶴千代は保栄茂家の婿養子となりハッピーエンド、というお話。紙面の都合で、乙鶴のけなげな言動や愛憎織りなす登場人物達を紹介することはできませんが台本をぜひご覧になりたい方は村史編集室までおこし下さい。（村史編集室 宜保

1993年6月号



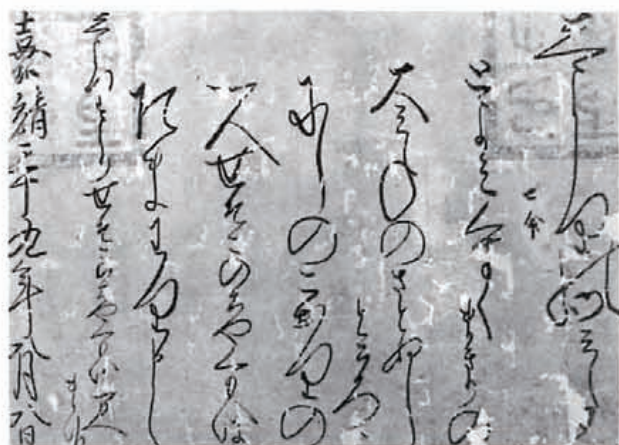
# 一五五九年の辞令書 「間切地頭の大嶺里主へ」

役所や企業などでは、職員  
の採用や人事異動の際に「辞  
令、氏名、△△部○○課勤務  
を命ずる」という、二〜三行  
程度の辞令書が手渡されます。

この制度は、社会体制とも  
深い関わりがあると思われま  
すが、我が琉球王国の時代で  
も今日の辞令書の内容とほぼ  
同様のもので「志よ里乃御ミ  
事」とか「首里之御詔」とい  
う標題の文書(写真)が盛んに  
発行されておりました。

今回は田名家文書の中から  
豊見城間切(村)に関連する二  
つの辞令書をご紹介します。

ひらがな書きのものは、一  
五五九年(尚元王四年)八月  
八日に大嶺里主真命という人  
物の任命辞令で内容は「首里



大嶺里主への辞令 (1559年)

(王府)のみことりの、豊見城  
間切の大嶺里主は、瀬底の大  
やくもい(職名)を命ずる。首  
里より瀬底へまいる(転勤)べ  
し」となっています。

漢文体の辞令書は、一六九  
八年(尚貞王二十七年)五月十  
六日付けで、儀間筑登之親雲  
上、真房という人物へ「豊見  
城間切田頭里主(地頭)を儀間  
筑登之親雲上に命ずる」とし  
ています。

私たちの周辺には、古い貴  
重な古文書などが人知れず眠  
っていることがあります。情  
報や資料を提供して頂ければ、  
専門家に相談し解説も可能で  
すのでご協力をよろしくお願  
い申し上げます。

(村史編集室・宜保)



儀間筑登之親雲上への辞令 (1698年)

恋の氏神がおわす島

— 琉歌にみえる瀬長島 —

皆さんは琉歌をご存知ですか。琉球の代表的な抒情詩形である「八八八六音」の三十字に作者の想いを歌っています。また、その形以外にも五五八六音、七五八六音などの本土からの影響を受けたと思われる「仲風」と呼ばれるものがあります。

さて、今回は豊見城に関する琉歌を取りあげてみました。  
 瀬長山下の岩の穴向かて  
 石小投げ入れる 人のおほさ  
 ず

読人しらず

（瀬長山の下には大きな岩がある。その岩の穴に小石を投げ入れる人が多いことよ。）

瀬長島はご存じの通り、かつては干潮時には徒歩で渡ることができる離れ小島でした。その



瀬長島 昔も今も恋と若者のスポット

昔、嶽の下のほうには子宝岩があり、大小二つの穴がありました。上の穴は小さく下の穴は大きかったようで、小石を投げて上の穴に入れば男児を生むことができ、下の穴に入れば女兒を生むことができると言われていました。古よりここに遊ぶ人々が必ず試みたので、穴は小石で一杯になっていたそうです。  
 瀬長山見れば 恋の氏神の  
 お招きが召ーやいら 我肝あま  
 ぢ

読人しらず

（瀬長山を見れば、恋の氏神が手招きされているのであろうか。私の心は動揺するのをおぼえる）

瀬長山は組踊りの「手水の縁」でも登場し、ロマンスの花を咲かせた場所でもあります。昔も今も変わりなく、若者たちに島へ渡ってみたいと思わせる神秘的な場所です。瀬長に恋の氏神がいらっしゃるのなら、きっとたくさんの恋の花が咲くのをご覧になったことでしょう。

豊見城に関する琉歌は沢山あります。今回は瀬長島にスポットをあててみましたがご存じでしたか。皆さんも身近な琉歌に触れてみませんか。

（村史編集室・大城）







「なんと！」

二百萬坪の水田があった」

### 〳〵 廃藩置県時の豊見城 〳〵

琉球藩を廃止して沖縄県を置く「廃藩置県」は今から百十四年前の明治十二年（一八七九年）四月に行われた。

それまでの沖縄の歴史は他府県と異なるもので、各地域で小規模な勢力が競い合ったグスク時代、続く三山分立時代、さらに三山統一後の王国時代（一六〇九年の薩摩侵攻後の日支両属時代含む）、徳川幕府の崩壊と明治政府樹立に伴う琉球藩の設置（七年間）、そして封建時代から近代へと移行する大きな時代の節目となった「廃藩置県」を迎えることになる。この大変革は私達が二十年前に経験した「本土復帰」とは比べものにならない程の激変であったと思われる。「唐ぬ世から大和ぬ世」と言われたように、親国とも仰ぐ中国との絆を断ち切られ、社会の仕組み全体を解体して新しく「沖縄県」を創設しようという時代であったからだ。

そうした時代背景を想像しながら、置県の翌年に当たる明治十三年の豊見城間切（村）の状況を考えてみよう――。

明治十三年の沖縄県統計によると、県人口は三十五万三千三百七十四人である。豊見城間切（村）は二十一カ村（字）で千五百十八世帯、人口七千四百六十三人であった。この時期には、現在の字与根と瀬長は行政区域である村（字）としてまだ登録されていなかったようである。さらに明治十六年（一八八三年）の県統計では、豊見城間切における耕地面積は、水田二百三万四千坪、畑百五十七万五千坪の合計三百六十万九千坪である。広大な水田面積は、今日の本村の状況からは想像できない程である。また、この耕地面積を一戸平均にすると約二千坪である。この数字は当時の本村における社会制度や農業、人々の生活や思想を考え



村内水田風景（S 20年代後半・瀬長）

るうえで貴重なものである。畑は主食のイモや雑穀、サトウキビが主要作物であったように、砂糖の村内生産高は年六千斤余であった。この年は、砂糖代金を前借りする形で、これまで使用していた石製の搾汁車を鉄製に切り替えられた、と記録されている。米作は、大正八年（一九一九年）の大干ばつの被害を受けたのを契機に畑作に切り替えられ、以後、急激に減少したのとことである。

今日まで各集落に伝わる年中行事や伝統行事は、農耕社会にあって真剣に生きる人々の「祈り」が形として伝えられたのではないだろうか。

村史編集室 宜保喜久



# 「手水の縁」と豊見城

〓組踊りの恋愛の舞台に!〓

「手水の縁」は、平敷屋朝敏（一七〇〇〜一七三四年）

の身の上を案ずる。

作の組踊りである。現存する組踊りは、約六十種と言われているが、その中でも代表的な恋愛ものの作品である。

第五段、玉津は志喜屋大屋

子、山口の西掟とともに知念浜への道行（遺言のつらね）。第六段、知念浜での山戸の必死の命乞いを許される。めでたく山戸、玉津の道行となる。

主人公は、島尻大主の嫡子一人娘・玉津である。この組踊りは三月三日に瀬長島で遊ぶ山戸の場面から始まる。

「手水の縁」は以上の六段構成になっている。主人公の

（うそ風もすだしや 瀬長山登て花ながめすらに 花とやり遊ば世間とよまれる 瀬長山見れば

波平山戸と玉津の愛、そして二人を取り巻く人々の思いやりで、その愛は実る。

花も咲き美さ 匂しほらしや 『琉球芸能事典』を参考に内容を紹介します。

「手水の縁」といえば、昔許田の村の美しい娘が、薩摩の武士に手水を飲ませてやったのが縁となり、薩摩へ連れて行かれ、村の人達を嘆かせたという話が伝わっている。

第一段、山戸と玉津の出会い、問答、約束。

手水は心を許した人に飲ますという風習があり、この手水の話は、若い者にロマンスの

第二段、山戸の道行（玉津のもとへ）密会、発覚。

夢を見せ、自分も手水を飲みたいと後にも数々の歌が詠ま

第三段、志喜屋の大屋子、山口の西掟の登場。（玉津が密会しているのを父に知られ、処刑を言いわたされる）

れている。沖縄だけに限らず、

第四段、山戸の道行（玉津

『万葉集』にも「鈴が音の早



手水の縁の一場面

馬駅の堤井の水を賜へな妹が直手に」という歌がある。

組踊り「手水の縁」では、玉津の波平玉川での通水ぶしがある。

（二月がなれば 心浮かされて 波平玉川に かしら洗は）

そして、山戸の手水を飲ましてくれというのに対して

（見ず知らずの里前 手水です 知らぬ あてなしよだいもの ゆるちたばうれ）

と返答。さらに、山戸の

（昔手に汲たる 情けから出でて 今に流れゆる 許田の手水

と話は進む。

皆さんも想いを寄せる人に手水を飲ませてみませんか。

きつと良い縁があるでしょう。

村史編集室 大城みゆき



# 「あゝ徴兵検査」

「島尻郡治要覧」の記録から

今回は豊見城村民を含む我が島尻郡民が『徴兵令』という新しい法律の施行にどのように対応したか、について御紹介します。

これから述べることは、単なる笑い話しやうわさ話の類ではなく、島尻郡役所が大正二年に発行した「島尻郡治要覧」のなかの「兵事」の項に記述されたものです。

明治三十一年の徴兵令実施の当時は、島尻郡民に軍事知識や思想はなく、青年たちの中には軍隊を知らないために徴兵忌避を企て、身体（主に人指しゆびなど）を損傷する者が多い。

このような者は、糸満、具志頭、玉城、知念、喜屋武、真壁、高嶺の六カ村におよび、刑罰に処せられた者も多い。（豊見城村名は指摘されていない。）

また、徴兵検査には一族や知人友人が付添人と称して群衆をなし、検査の結果をうかがい「不合格」となるや、数日にわたり祝典を張る。

「合格」すれば入営時まで



個人の慰安的見舞いを受け、その家族は見舞い客の対応をするため休業する風習がある。同郡治要覧は続けて次のように述べている。

明治四十一年になると、社会教育や各市町村の夜学会で軍事知識をはじめ、国語、修身算術の教育が進み、徴兵検査を忌避する者もなく、結果、良好である。なかには、甲種合格し、めでたく満期除隊して帰郷した者もいる。と結んでいる。

身体を損傷して「徴兵忌避」、不合格の時には「数日祝典」、合格すれば入営時まで「お見舞い」、検査時には付添人が「群衆」でなど、当時の人々の深刻で真剣な対応ぶりが想像できます。

村史編集室 宜保喜久



# 『おもろさうし』 に見る豊見城

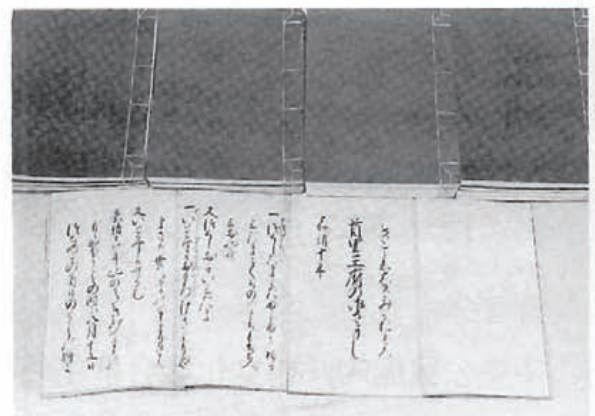
『おもろさうし』は千五百五十四首を二十二巻に収めた沖縄最古の歌謡集である。編集は巻一が嘉靖十(一五三二)年に開始され、約九十年間をかけ天啓三(一六二三)年まで記述されている。

一七〇九年十一月二十日、王城が炎上し『おもろさうし』も焼滅してしまい、津嘉山按司朝睦が「書改奉行」となり半年あまりで二十二冊の「尚家本」と「安仁屋本」の二部が書き改められた。尚家本は、沖縄戦で米国へ渡ったが一九五三年沖縄に返還され重要文化財として県立博物館に所蔵されている。しかし安仁屋本

は行方不明のままであり、先頃懸賞金十萬ドルがかけられ日米のマスコミで報道された。懸賞金をかけて探しているのは、現在日本でただ一人「おもろ」を謡える安仁屋真昭氏(九州芸工大助教授)。

そんな話題のあったおもろだが豊見城関連を見てみよう。

一 糸数てだよ  
按司添いてだよ  
歡へて輝ちよわれ  
又 今日の良かる日に  
又 今日のきやかかる日に  
又 浦崎に使い  
我那覇に使い  
糸数てだよ、按司添いてだよ、喜び輝いておわしませ。



重要文化財「おもろさうし」

今日の吉日に、今日の輝ける日に、浦崎に、我那覇にお迎えの使いを出されることだ。

玉城村糸数の領主(按司)は、三山対立時代に世の主と呼ばれ威勢を近隣に誇っていた。遠方豊見城村の我那覇の周辺までその力の大きさを誇示していた。

『おもろさうし』では、他にも保栄茂や平良などが数百謡われている。

(村史編集室 大城みゆき)



# 『豊見城に雪が降った!!』

〓百五十一年前の三月某日〓

『昔、この豊見城にも雪が降った』と言ったら、皆さんは「ウツソー」とか「まつさかー」とお思いでしょう？

ところが文献で見ると、それは「ホント」事実なのです。それは琉球王府の正式な歴史書である「球陽」にちゃんと記録として残っているのです。

それによると、雪が降ったのは一八四三年（尚育王九年）の旧暦二月、『島尻十二郡に唐豆や白豆、小指の先にも似た雪が降った。形も大小さまざま



まである』と各郡の役人たちから王府へ報告があった、というものです。

島尻十二郡とは当時、真和志、小禄（現那覇市）、豊見城、大里、南風原、東風平、佐敷、玉城と現糸満市内の兼城、高嶺、摩文仁、真壁のことである。ところで、「雪」が降ったと報告した郡役人というのは、各郡に置かれている間切番所の役人で、地元出身の地頭代（村長）をはじめ、補佐役のさばくり、筆者などの他、なかには王府から派遣されて駐留した下級士族もいたようであり、いずれにしても公式な行政機関からの公式な「報告」であった、ということなのです。

「雪が降った」という内容

については少し疑問もありません。雪の形を表わす形容詞が唐豆、白豆、小指となっており、フワフワと降る雪のイメージとは程遠くもつと硬いものだったので、まず、ヒョウに推測できるから。ヒョウについては球陽の別の項に「雹」という表現で出ているのでこれではない。では「みぞれ」だったのでは？とも考えられますが、なにぶん百五十年前の表現であり、確認することは今のところ難しいようです。また琉球の言語の中にユチ（雪）、ユチフユ（雪冬）といった表現もあり、沖縄と「雪」との関係は文献や言語学、民俗学、気象学の観点からも非常に興味深いテーマであると思います。調査研究したいというロマンチックな方はいませんか？

（村史編集室 宜保喜久）



## ハーリーの始祖・汪応祖 六百年前に漫湖で競漕

六月十二日は、旧暦の五月四日にあたり、各地でハーリー（爬龍舟競漕）が行われる。字豊見城自治会や門中の方々もこの日は豊見城城跡にある豊見瀬の嶽を参拝する。

沖繩のハーリー行事は、長崎県のペーロン競漕と共に中国から伝来した行事として広く知られている。

しかし、沖繩でのハーリーの起源や豊見城村との関係については、案外に知られていないようです。そこで、今回は琉球王国時代の歴史書の中から「ハーリーはじめて物語」をご紹介します。

中山世譜（一七〇一年編集）によると「閩人（中国・福建省人）三十六姓の渡来後に始めて舟を造り、江に競渡す」と伝えていきます。

また、琉球国旧記（一七三一年編集）では、誰が始めたとは書いていないが、ハーリーを次のように伝えていきます。「昔、久米村、那覇村、若狭町、垣花、泉崎、上泊、下泊などに爬龍舟数隻あり、今は那覇、久米村、泊村の三隻のみである。四月二十八日から五月四日まで唐棠の前江や那覇港で競漕する」としています。

球陽（一七四五年編集）で

は「俗言にいわく、昔、長浜大夫（どういいう人物か不明）という者が王命を受けて南京へ赴き、後に龍舟を始めて造り五月初めに競漕した」と記録しています。

同じく球陽には、後に南山王となる汪応祖をハーリーの始祖とする有力な記述があり豊見城村との関係も説明されています。

「一説では、南山王の弟・汪応祖が南京の国子監に留学した時、川で龍舟競漕をみて非常に心ひかれ、帰国後に豊見城に城を築き住居とした。これを名づけて『豊見城』という。

この時期に中国の製法にならって龍舟を建造し、五月初めに那覇江中（漫湖）に浮べて遊んだ。人々も汪応祖にならって龍舟を作った。

五月四日になると、各村のハーリー舟は必ず漫湖で競漕して汪応祖にお目にかけた。

那覇、久米村、泊村の三隻は、この日かならず豊見瀬部（豊見城城内の拝所）に来て、豊見城祝女の案内で祭品を備えて礼拝する。また、三隻の漕手たちは、城下の津屋に上陸して豊見瀬に向けて礼拝した。これにより（ハーリーは）始まる」といいます。

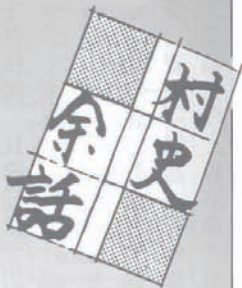
沖繩における爬龍舟競漕の起源は、汪応祖説が有力であり、したがって、豊見城村も「発祥の地」として有力である。ということになります。

球陽の記録から推測すれば汪応祖が南京に留学したのが一三九三年で、帰国後に豊見城の城主として一四〇三年まで豊見城に居住し、一四〇四年に承察度の跡目をついで第二代南山王になるまでの約十年の間に爬龍舟競漕（ハーリー）が始まった、と考えられる。つまり、ハーリーの起源は今から五九〇―六〇〇年前にさかのぼることができます。

村史編集室 宜保喜久



豊見城城跡より漫湖を望む



# 家譜にみる豊見城

家譜（系図）は、一般に血統や各人の履歴を記録したものである。家譜の作成は士族だけに許されたもので、士族系持（系図持ち）とし、持たない百姓は無系と言われた。

家譜の編集は、一六〇五年頃、一六七〇年、一六七九年とあり、四度めの康熙二八年（一六八九年）には、王府の管理下で「系図座」が設置され、御朱印「首里之印」が押された。また、それに加えて「仕次（しつぎ）」という五

年に一度の割合で子孫の名前、生年月日や任職、在職中の出来事や結婚、出産、勲功等を継ぎ足すことができた。この頃の系図は、二部作成し、一部は系図座で、もう一部は各家で保管された。その数千もあったという家譜は、去った沖繩戦によって多く焼失してしまった。現存するのは約六五〇冊という。

「那覇市史」では、那覇・泊系、久米村系、首里系と三冊の家譜資料をだしている。

それを参考に豊見城関係を調べてみた。現在の段階でみると、地頭職で四六人、その他関係文書も八三カ所あった。ところで、皆さんは阿麻和利と護佐丸の戦いをご存じだろうか。その護佐丸が豊見城と大いに関係がある。阿麻和利との戦いで唯一生き残ったのが、三男の盛親であった。この盛親は、尚円王の時代に取り立てられ、豊見城親方盛親と称し、殿内を創設し、毛姓を名乗り、豊見城間切の総地頭として、永代に領地を拝領することになった。

「門中風土記」を見てみると毛姓は盛親の長男である盛庸が豊見城殿内を継ぎ次男の盛秀が阿波根殿内、三男の盛里が沢岬殿内を新たに創設、御三家時代を迎えた。さらに同門中は王府の要職に就き、「富川」「座喜味」

「伊野波」「勝連」「亀川」「国頭」の各殿内を創設。これを「七総地頭の時代」（一六〇〇年代）といい、同一門中からの七総地頭がでるといえるのは、他にはほとんどみられない。毛姓の門中の名門ぶりがうかがえる。

「豊見城毛姓」は護佐丸を始祖とし、盛親の血が子から孫へと広がり、現在はその数は五万〜一〇万だと言われている。

（村史編纂室 大城みゆき）



各家譜の世系図(那覇市史より)



# 平良、田頭の移転

## 一七七二年と八六年に王府が許可

琉球王府時代は、百姓（農民）が耕作している田や畑、居住する村（字）や個人の屋敷、山林原野、墓地等、全ての土地が王府の所有地になっていた。百姓達は、その土地の借地料を租税の名目で納税する、「王府の小作人」の立場におかれていたようである。

このような土地や税の制度は、沖縄県の特殊事情を配慮して廃藩置県の後も旧慣制度として適用されたが、明治三十六年（一九〇三年）までに多くの抵抗をおさえて断行した土地整理（改革）によって、百姓達の土地所有が認められるようになった。

王府時代に字平良と字田頭が村替え（字の移転）をした記録があり土地制度や村（字）の状況を知る手がかりとして興味深いので紹介します。

その記録は、球陽の十六、十七巻に次のように伝えている。平良は尚穆王二十一年（一七七二）に移転が王府から許可された。平良村は一六八三年（中国年号の康熙二十二年）

現在の豊見城団地西分譲あたりの平良古島（？）に移転したが、そこはヤセ地で石ころが多く、生産量が低いので百姓の人数も減少して苦勞しているという理由で、移転申請を行い現在の字平良に戻ったようである。

また、田頭は一七八六年に田頭古島と呼ばれている国道三三一号沿いのキラギの近くから現在地に移転許可されたものと思われる。

田頭部落の移転理由は「下民は病身に耐えず疲勞し、民家も減少；用水不便；」をあげており、移転先は「土地も肥え、田畑の用水も便利で、作物の増収が見込まれる」というもの。

また、平良、田頭の両村とも移転先は「地理」（フンシ＝風水）も良いと地形的な条件もあげている。

字平良が移転した一七七二年は、正月に高嶺間切与座村で発生した疫病

が国中に広がり、この年だけで四千五百六十人余が死亡しており、困窮していたのは平良だけでなく琉球全体が凶年であったようである。

田頭の移転した前後に摩文仁間切波平村、勝連間切内間村が旧籍（元の部落）に移されており、台風や干ばつ、病害虫の発生や疫病の流行の際に村の移転が多く行われたことが推測される。

村史編纂室 宜保 喜久



ファースト・フード店などが立つ現在の田頭古島



村史  
余話

高安村の金城、外間筑登之  
本部郡に製糖の秘法教える

尚瀬王六年(一八〇九年)に本部郡(現在の本部町)の下知役、両惣地頭、田地奉行らが、豊見城郡高安村の金城筑登之と外間筑登之を本部郡に招き、黒糖製造の技術指導を受けた、との請願があったので王府が許可した。

請願の内容は「本部郡の百姓たちは、製糖の知識や技術に乏しく不便をかこっている」としている。

金城、外間の両筑登之は、本部郡に赴き、力の限りをつくし、誠心こめてシーゾー(製造)の秘伝を教えた。

その結果、本部産の黒糖は品質も向上し、生産量も増えて、その利益は本部郡にとってははなはだ大きいものがあった。

金城・外間両筑登之の功績を讃えて褒賞を賜われるように、本部郡から王府に改めて請願した。

王府は、金城筑登之と外間筑登

之の功労にむくいることにし、黄冠位の位をさずけた。黄冠というのは、筑登之親雲上の位のかぶることが許された「帽子」のこと、二人とも「筑登之親雲上」に昇進したことになります。

だが、元来が百姓であり昇進したといっても、王府や豊見城郡の役職についた、ということではないようである。

ところで、沖縄で製糖技術が普及し、サーターヤーが各村(字)にできるのは、一六二三年に儀間親方真常が指導した以後のことである。

また、首里王府は薩摩役人の指示により、黒糖の自由販売を禁止し、王府による専売制にした。

一六六二年には、王府に砂糖奉行を設置して、キビの作付け面積の制限、砂糖の生産管理、薩摩への納付や販売を厳しく取り扱ったようである。砂糖キビの植え付けが



昔ながらのサーターヤー(字高安)

許されたのは、沖縄本島の中南部一帯に限られ、離島や本島北部地区は後年になってからであった。

金城・外間両筑登之が本部郡にシーゾー指導に当たった一八〇九年の少し前に本部郡でもキビの植え付けと製糖が許可された、ことが推測できる。

砂糖は、租税として米に替えて納付したり、また、王府にとっては百姓から一括買い上げて薩摩や大阪に販売することで大きな財源となった。一方、薩摩藩にとって琉球糖の独占権をもつことにより、大阪の砂糖相場を左右するほど経済的な利益を得たようだ。

村史編纂室 宜保喜久



# 「旧海軍司令部壕」

≫ 字豊見城 ≪

字豊見城（ドゥームラ）にある海軍壕は、正式には「旧海軍司令部壕」といい、沖縄戦が始まる約一年前に設けられた沖縄方面根拠地隊の海軍司令部壕でした。昭和十九年八月から壕づくりが始まり、同年十二月には完成したといわれています。

壕は、抗木とコンクリートで固められ、長さ約四百五十メートルもあり、司令室、作戦室、幕僚室、暗号室、医療室、発電室などのほか、井戸や炊事場まで備えられています。司令官は海軍の大田実少将でした。そこで沖縄方面根拠地隊について少し説明しましょう。昭和十六年十二月八日の真珠湾奇襲攻撃を皮切りに、日本軍は南太平洋の島々を次々と占領し、破竹の勢いで快進撃を続けていきました。しかし、昭和十七年中期頃になると、

連合軍の猛反撃が開始され、戦況は次第に逆転していきます。

そのような中、日本軍は本土、南西諸島、台湾、フィリピンの防備の必要性を唱え、その一環として創設されたのが沖縄守備隊（第三十二軍）でした。その中の部隊のひとつが海軍沖縄方面根拠地隊なのです。

俄然優位に立った連合軍は昭和二十年四月一日、いよいよ沖縄本島へ上陸、圧倒的な軍事力で陣地を広げていき、海軍司令部の防衛地域である小禄飛行場、小禄村、豊見城村の占領はもはや時間の問題となりました。

そして昭和二十年六月六日、海軍司令部の捨て身の抵抗もむなしく、とうとう連合軍は小禄地区に進攻、小禄飛行場を占領します。

一方、追いつめられた海軍司令官大田実少将は、「沖縄県民かく



海軍壕内の司令官室

戦えり、県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」と沖縄県民がいかにか献身的に軍に協力したかを詳しく述べるとともに沖縄の将来を憂えた訣別電を海軍次官あてに送り、その一週間後の六月十三日午前一時、海軍司令部壕内で自決をとげます。

沖縄の海軍部隊は約一万人。このうち、約四千人の将兵が小禄地区及び海軍司令部壕内で最期をとげたといわれています。

村史編纂室 安谷屋元

# 村史 余話

## 家庭を守る 『火の神(ヒヌカン)』

沖縄で「火の神」は、今でも多くの人々に信仰されている。豊見城も含め「ヒヌカン」の呼称が一般的であるが、他に「ウカマ」「ウミチムン」という呼び方などがある。与論島では、「ピアンガナシ」、加計呂麻島では「ヒニハムガナシ」という。

火の神は、昔は竈かまどそのものを拝み、やがて火の神の神体となる竈をかたどった三個の石を拝むようになり、また、現在のように台所で陶製の香炉を置いて拝むように変化していった。これは、生活の様式が変わり台所が変化したことを示している。

火の神は、仏壇が出てくる前から沖縄で拝まれていた。冠婚葬祭や年中行事、家庭行事は、仏壇を拝む前に火の神から拝むことになっている。旧暦の一日と十五日は、その家の主婦が、線香と「ウブク」(供え物)を供えて家族の健康を祈願する。また、家族に災厄があり、それが他人のイチジヤマ(生霊)によるものだとすれば、火の神に拝み呪いを解いてくれるように祈るのであった。



今でも多くの人々に信仰されている「火の神」

また、火の神は「御通し神」とも言われている。旧暦十二月二十四日に昇天し、一年間の家の出来事を天の神様に報告する。下天の日は地域により違いがみられるが、年の夜(大晦日)、正月初四日、初五日と考えられている。火の神が御通し神ということ、竈の前で不平や不満、人の悪口などは、慎むべきことと言われてきている。また県下で他にタブーとされていることに、竈前での喧嘩、子供の叱責、哭泣、汚い物を竈の上に置くこと、竈上を叩くこと、竈に足を乗せたり、踏んだりしないことなどがある。

(村史編纂室 大城みゆき)

1994年11月号



## 昭和二十年の「北郷国民学校」

### 学童疎開児たちの写真

太平洋戦争中の昭和十九年八、九月から昭和二十一年十、

十一月の二年余にわたり、第

一豊見城国民学校（現在の長嶺小）と、第二豊見城国民学校（現在の座安小）から児童二百九名、引率教師六名、保母十三名の合計二百二十八名が宮崎県に学童疎開しました。学童疎開を受け入れたのは宮崎県高千穂町（岩戸村、上野村）、北郷村の国民学校やお寺、民家など地域によっても異なります。

北郷国民学校の当時の学令（籍）簿をみると、担任教師は子供たちの身体状況について、「食料不足ト寒サノ為顔色悪シ」、「時々頭痛ヲ訴ヘル。顔色悪シ」、「健康ナレド常に不潔ナル」などの所見が多い、水たまりに氷が張る寒い日にもクツがな

く素足、半ズボン姿の学童だったそうです。写真の裏書きによると、昭和二十年一月となっており食糧不足、栄養不良と寒さに耐えなければならぬ非常に

村史編纂室  
宜保 喜久



親元を離れて頑張った学童疎開児童と宇久里先生(中央)(昭和20年1月)



# 地頭代など16名を確認

二百八十年前の

豊見城間切役人

人口四万五千人余を擁し村としての人口規模は日本一を誇る豊見城村。このマンモス村の行政運営に当たる村長、

助役、収入役などの常勤特別職を含めた村職員も三百八十三人となっています。

ところで今から二百八十年前の豊見城間切はどうであったか。タイムスリップでのぞいてみたいと思います。

一七一三年は、尚敬が十四歳で琉球国王に就いた年ですが、以前から編集を進めていた『琉球国由来記』が完成した年でもあります。その「由来記」の中で「諸間切諸島夫地頭認理オエカ人の事」というタイトルで豊見城間切地方役人（百姓身分）の役職名十六人が掲載されています。

それによると、現在の村長に相当する地頭代は座安大屋子、非常勤の相談役（助役）として嘉数大屋子、大田大屋子、宇栄田大屋子の三人がおり、地頭代を含めたこの四人を夫

地頭と呼び、親雲上の位が授けられた。また、地頭代直属の部下職員として首里大屋子、大掟、南風掟、西掟がおり、さらに南風原掟（字豊見城）、我那覇掟、儀保掟、保栄茂掟、平良掟、高安掟、長嶺掟、根指部掟の村掟の職名がある。

当時の村（字）は二十あったとされているので、一人の掟が一村、または二、三村を担当区域として農業生産や納税、教育や風紀などの全般の現地指導、監督に当たっていたと考えられます。別資料によると、この十六人の地方役人の他に耕作当（田畑の耕作担当）、山当（屋敷内の竹、シユロ、九年母や山林の上木を監督）、番所の事務見習い兼雑用係として文子、見習文子といった職名も見られます。

ところで地頭代の任期は三年が原則とされ、首里大屋子、大掟、南風掟などが順次に夫地頭へ昇進した、と考えられます。

（村史編纂室 宜保喜久）



1719年に冊封副使として来琉した徐葆光が書いた地図の一部分

# 村史 余話

## 五十年前のお正月

### 刻一刻と迫る米軍上陸に

おびえながら……

今年を終戦五十周年……。ところでその五十年前、昭和二十年の豊見城村では一体どのような正月を迎えていたのでしょうか。昭和十六年十二月八日に幕を開けた太平洋戦争は、当初、日本軍が南洋の島々を次々占領し展開を優位に。しかしそれも束の間、昭和十七年中期頃を境に戦況は次第に逆転、日本軍は連合軍の沖縄上陸も想定せざるをえなくなり作戦をたて始めます。

昭和十九年頃には、連合軍はサイパン、フィリピンへと進攻、そのことは連合軍の沖縄上陸が一層現実味を増してきたということと県民にとっても大きな衝撃を与えました。実際に沖縄県では、この年、日本軍による全島の要塞化が

着々と開始、同年三月には沖

縄守備軍第三十二軍が創設され、県内各地で飛行場などの軍事施設建設が始まり、労働力、食糧、資材等が軍に供出させられました。次いで同年七月、緊急閣議で南西諸島の老幼婦女子、学童の集団疎開が決定、八月から疎開が開始されます。本村でも学童ら二百名余りが宮崎県北郷村、高千穂町に向け八月二十五日に那覇港を出発しています。

そして昭和十九年十月十日、とうとう連合軍は県都那覇市への大空襲を実施、たった一日で那覇市は九割が焼失してしまいました。その悲惨な光景を間近に見た豊見城村民が震え上がったのは言うまでもありません。刻一刻と迫る連



瀬長島、与根方面を攻撃する米海兵隊

合軍の沖縄上陸におびえながらの当時の正月(旧正月)はどうだったでしょうか。「いつ米軍が上陸するか分からないのに、それどころではなかった」と回想するAさん、また逆に「最後の正月かも知れないと、豚をつぶして家族全員で食べた」と語るSさん。いずれにしても全体的に暗澹とした正月を過ごしていたようです。

村史編纂室 安谷屋 元



## 二月ウマチー (麦穂祭)について

「ウマチー（御祭）」には二月ウマチー（麦穂祭）、三月ウマチー（麦大祭）、五月ウマチー（稲穂祭）、六月ウマチー（稲大祭）の四つがあります。文献を見てみると、「麦稲四祭」とされています。

二月ウマチーは、前年に播いた麦の穂が結実する頃に行われ、初穂を三本または七本仏壇や神棚、拝所に供えて麦の穂に豊かな実りがあるようにと祈願するものです。

『琉球國由来記』には、「二月、公儀ヨリ日撰、拜ミ申。遊二日ノ事」とあり、現在のようには十五日と固定しておらず、二月中に公事が吉日を選び、その日に諸間切の根所に

席を設けてノロが祭祀を行い、庶民は慎んで二日間仕事を休まなければならなかったことがわかります。穀物儀礼の際には、物忌み（祭りにあたって神を迎えるためにある期間中、日常的な行為を慎み清浄を保ち、不浄を避けること）が慣行され、畑に行くことや肥桶を担ぐこと、針仕事をすることも禁じられていました。もし、それを守らず仕事をすめる者がいれば、その者に災いが降りかかったり、ハブに咬まれたりすると言われていたそうです。

『沖縄縣史』で見ると、二月ウマチーの呼び方は、地域によっても違いがあり、知念村



ウマチーには初穂が供えられた

久手堅で「カタウマチー」、伊計島で「フー（穂）ウマチー」、渡名喜島で「アラフバナ（新穂花）」などがあります。

現在では、他の地域でも麦作が行われなくなったので、本来の形や意味がかなり変容してウマチーが継続されています。わが村でも早くから麦作はなくなっただけで詳しい祭祀の様子は分かりませんが、門中や各家庭において行事を行っている所もあるようです。

（村史編纂室 大城みゆき）

今から二百八十二年前の  
七一年(尚敬王元年)に、  
蔡温と毛文哲が首里城、玉陵  
崇元寺の地理(風水)フンシ  
を観測した、という記録があ  
る(球陽 卷十)。

蔡温らは、おそらく首里城  
の高い城壁や拝所から三六〇  
度を展望したのでろう。

「首里城は、風水を知らな  
い人の目から見れば、土地は  
険しく狭い、そのうえデコボ  
コで平坦なところがなく、何  
ら取り立てて良いところがな



## 「豊見城は青龍」

### 蔡温、首里城の風水 (フンシー)をみる

いと思うだろう」と、前置き  
したうえで次のように述べて  
いる。



「首里の左には小祿・豊見  
城の嶺々が「青龍」となり、  
右には北谷・読谷山の嶺々が  
「白虎」となって、左右から  
守護している。また西原、島  
尻一帯の嶺々は後方からの守  
り(玄武?)となり、前方の  
慶良間の島々は盛気の流失を  
遮ぎり、守っている錦の屏風  
(朱雀?)であり、四つの守  
護神に加護されている。また、  
吉方(東?)から首里城を抱  
きかかえるように、三つの川  
が流れ、那覇、泊、安謝の港

に注ぎ、大洋に通じている。  
首里城正殿からの通路も曲折  
し、各門も向きを変化させて  
おり、地理の観点からも実に  
味わい深いものがある。

このように「龍の来歴や、  
気脈の鐘る所」に立地した首  
里城は、風水説(理論)に合  
致した秀れた所であり、決し  
て他所に移転すべきでない」と  
絶讃している。それにしても、  
かの有名な蔡温が豊見城  
を青龍に見立てたとは、とよ  
み(気高い、名だかい)とみ  
ぐすく村に住む者にとって誇  
らしい気分になる。



字金良は風水所。(写真左が東門ウタキ碑文)

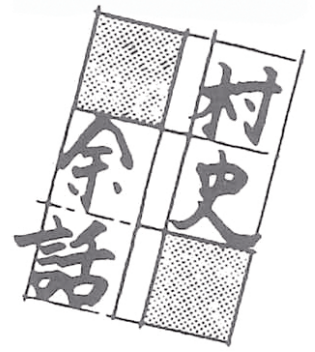
風水の学(術)は、中国伝来  
のもので、王城、村落、墓地  
住宅の移転や新築をする際に、  
前もって地理、水利、地形、  
風向、景観などを観測するも  
ので、その目的は「将来の災  
禍をさけ、幸福を招く」とい  
う思想に基づいている。

風水思想は、農村地域であ  
った豊見城村内にも残ってい  
る。集落風水では字平良(一  
七七二年)、字田頭(一七八  
六年)の移転に関しての記述  
(球陽)がある。字金良の東  
門ウタキ碑文(一八二二年)は、  
風水所(自然景観の保護区域)  
と思われる、内容であるとい  
う。

また、墓地風水には字嘉数  
の赤嶺家墓誌(一七九二年)  
がある。村内には、未発見、  
未確認の風水遺跡や資料があ  
るのではないか?

(村史編集室 宜保喜久)





# 「歩兵第二十二連隊」

## (山三四七四部隊)

50年の歳月が過ぎてもまだ…

去る三月九日、村史編纂室に戦

争遺留品の入った袋がひとつ届けられました。

それらの遺留品は、字長堂の良長園近くの道路拡張工事が行われている場所から出土してきたものです。

戦争資料などで調べた結果、遺留品は「第三十二軍・歩兵第二十二連隊」、通称「山三四七四部隊」のものだということがわかりました。この「山三四七四部隊」は、四国十一師団管下、愛媛県松山の連隊でした。隊長に吉田勝中佐、多くが愛媛県、北海道出身者によって編成されていました。

支那事変に動員され、中国大陸を転戦、満州八十八部隊として、当時の満州国東安省に駐屯していま

した。

そして昭和十九年四月、第一大隊が南洋諸島のメレオン島で玉碎し、第一大隊欠のまま八月、沖縄の現地徴収兵を迎え入れ沖縄に防衛隊として配置されることになりました。

遺留品の中身は、医薬品、ビールビン、ガラスコップ、メガネ、靴など、見ているだけでも当時の状況がリアルに想像できます。

実はこれらの遺留品が出てきた工事現場付近で、昭和五十三年十一月に厚生省の遺骨収集作業が行われていました。近くの歩兵第二十二連隊壕から二十六柱の遺骨が収集されましたが、壕内の落盤がひどく、作業は困難を極めたようです。



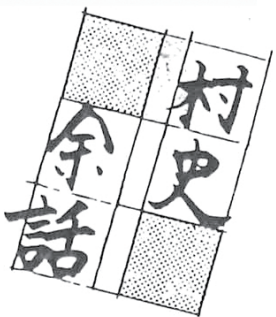
出土した遺留品の数々

おそらくその時、土中に埋もれていた個所が今回の工事によって切り崩されて、遺留品の出土につながったのではないのでしょうか。すでに沖縄戦終結から五十年の歳月が流れようとしています。まだまだ村でも発見されない遺骨、遺留品などがあるものと思われま

す。村民のみなさん、もし何か戦争遺留品と思われるものを発見なさったら、村史編纂室までご一報下さい。

(村史編纂室 安谷屋 元)

1996年2月号



## 伊良波収容所の「四月バカ」

～戦後すぐのエイプリル・フール～

昭和二十一年（一九四六）といえば、沖繩戦の終戦の翌年である。その年の「四月一日」のことを覚えている方はいませんか？

では「字伊良波にあった村民収容所での津波さわぎ」をご記憶の方はいませんか？

この日の夕方「大きな津波が沖繩に襲ってくる」という米軍情報が伊良波収容所にも伝えられ、与根海岸から志茂田平野、この伊良波収容所一帯がアブナイ、という。

そのため、米軍払い下げのテントに住んでいた村民たちは、現在の伊良波中学校一帯の丘に避難した、というわけである。

すでに日も暮れ、丘の上から与根の沖合の白波や海岸の白浜がぼんやり見える。四月一日ではあるが、風がつめた。予定の時間も過ぎて、人々は待ちくたびれて、ふもとのテント小屋にもどった。あの時の情景なら覚えている方が意外と多いのではないだろうか。

終戦五〇年の写真・生活資料展の資料集めの時に知った

事件なのですが、あの日は「エイプリル・フール」四月バカ」だった、というのです。このウソにまんまとひっかかったのは、伊良波収容所にいた村民だけであるのか、他の地域でもダマされたのか、占領軍の米軍兵士たちも信じたのか、興味ある事件である。まずは、村民の記憶を確かめる必要がある、と思う。

「四月一日」「津波さわぎ」が一致した事実とすれば、戦後の本村の歴史をヒモとく、重要なキーワードになるからです。

昭和二十年の十一月に帰村が許可され、その後、各地に避難し、移動させられていた村民が一時的に、字伊良波の収容所に集まり始めた、ということである。直接、各字の自分の屋敷に帰れたのではなく、少なくとも昭和二十一年「四月一日」まで、伊良波の収容所に「居た」という証明になるからです。

“あの日”の事を覚えている方は、ぜひ、お電話下さい。

八五六―三六七―  
村史編さん室 宜保 喜久



「招かざる客？」

だったベツテルハイム

〜到来異国人のはなし〜

国際化時代といわれる現代、交通機関や通信手段の発達で世界はより近くなり、各国との交流も盛んに行われるようになりました。しかし、鎖国政策下にあった江戸時代には、今日のような外国人との接触はほとんど無く、彼らの来訪は一大事件だったようです。

今からおよそ一五〇年前、一八四〇年代になると「交和・交易」を求め、異国船が沖縄近海に頻繁に來航しました。

そして、小船を漕ぎ寄せ上陸し付近を調査したり、なかには長期滞在する者もあらわれました。滞在者の多くは宣教師で、王府は国内にキリスト教が広まることや、琉球と薩摩の関係を知られるのを恐れ、常に役人を付き添わせ、その行動を逐一記録し、王府や薩摩の役人へ報告させました。その記録には、彼らがたびたび豊見城村へ訪れていたことが記されています。

王府の「英人來着日記」によると、一八四七年十一月二十一日、イギリス人が真玉橋村の砂糖小屋（サーター

ヤー）で、サトウキビを一本買い求めたという記事が出てきますが、このイギリス人は、あの「波之上の眼鏡」で有名なベツテルハイムのことです。彼は一八四六年四月から約八年間も沖縄に滞在しており、この間に何度か豊見城に立ち寄っているようです。また同年八月二十七日にはフランス人二人が、豊見城村（字豊見城）の瀬長筑登之の庭へ立ち寄り、瀬長筑登之に稲まつみ（収穫した稲束を積み上げたもの）のことを尋ねたり、九年母（みかん）を売り渡してくるよう申し入れ、断られたことが「仏朗西人來着日記」に記されています。

このほか、「石び屋あし（石火矢橋?）」、「金良森」、「渡嘉敷村前之森」など村内各地に立ち寄っていることも記されており、当時の村民が、この「突然の來訪者」にどのようなに接していたかを垣間見ることのできる貴重な資料です。

（村史編纂室 儀間淳一）

1996年3月号



## 時代を担う子や孫に 今、語り継ぐ 「戦時・戦後体験記」

く米軍の部隊等が駐屯しており、字にすぐ戻れなかったのもそれがひとつの理由であった。

——などなどです。沖縄戦においては、本村に関する記録や資料等が非常に少ないだけにそれらの証言や体験談は村内における今後の戦争記録の編さん等に役立つものと思います。時代を担う子や孫に、二十世紀最大の悲劇・沖縄戦の体験を是非語り継ぎたい——とお思いの皆様は今後のご協力をお願い申し上げます。

◎お問い合わせ先

村史編さん室

☎八五六―三六七―

陸するとの軍の予測により、村内沿岸部の住民に避難命令があった。

◎村内字与根から翁長にかけて現在の国道三三二号沿いに日本軍が滑走路を建設したが、ほとんど使用することなく終戦を迎えたこと。

◎10・10空襲の際、米軍機が村内?に墜落。捕虜となった米兵を日本軍が村役場前から那覇方面へ徒歩で護送するのを多くの村民が目撃した。

◎山原に疎開した村民の多くは、大宜味村喜如嘉方面を割り当てられ、そこでも苛酷な避難生活を送ったこと。

◎村民は四月一日の米軍上陸後もしばらくは村内にとどまり首里戦線が緊迫した五月中旬以降に島尻方面へ避難した。

◎沖縄戦を生き延びた村民の多くは、中・北部の収容所から昭和二十年十一月頃に帰村を許されるが、すぐには自分の部落に戻れず、伊良波、渡橋名にあった収容所で半年ほどテント生活をした。部落には終戦後しばらく



瀬長の護岸を護送される住民

村史編さん室は、今年二月から村内の各老人クラブのご協力を得て、「村民の戦時・戦後体験記（談）」の聞き取り調査をスタート。調査対象者の数もまだ少数ですが、大変興味深い事実や当時の状況がその証言の中から明らかになってきました。その一部を紹介してみますとー。

◎昭和十九年の10・10空襲の直後、那覇、小禄方面の人々が村内に数多く一時避難をしてきた。

◎沖縄戦が始まる以前には、ほとんどの家庭に日本軍が寄宿していた。

◎与根・瀬長海岸に米軍が上



## 宜野座村の墓標に刻まれた 本村関連の資料二点!!

先日、宜野座村立博物館を訪れた際、展示資料のなかに豊見城村関連のものと思われる資料が二点ありました。それは終戦後、宜野座村内の収容所で亡くなった方の墓標で、宜野座村古知屋（現在の字松田）第二共同墓地跡で行われた厚生省による収骨作業で採集されたものです。この墓標には縦約二十四センチ、横約十五センチの（千枚岩？）に「豊見<sup>大高</sup>□ 字我那<sup>大高</sup>ハ 故安谷<sup>大高</sup>□□□」、裏面には「ノバル小（小の部分は途中より欠落）ガナハ」と彫られており、もう一点は屋根瓦にペンキで表裏ともに「ピン 當銘ウシ」と書かれていました。



本村関連の墓標「字我那ハ 故 豊見 安谷」と刻まれている

昭和二十年六月から九月にかけて、宜野座村内には、米軍側が設置した収容所に約十万人の難民が収容されていたといわれ、その多くは飢餓や負傷、病気（マラリア）等に苦しみ、毎日多くの死者が出たそうです。そのなかには当時の豊見城村民も多く含まれていたようで、『宜野座村史』に収録されている「古知屋・福山共同墓地死亡者名簿」には八十五名の方々の名前が記されています。これは身元の確認されている方だけなので、本来はもっと多くの方々がこの地で亡くなったものと思われるかもしれません。遺体は村内の各地に埋葬され、その際身元確

認のできた遺体は、埋葬作業者や死亡者の身内などが、石やレンガ、軍作業で余った角材やセメント等に死者の名前や本籍地等を刻み墓標としたり、死に水として薬瓶や水筒等に水を入れ死者とともに埋葬したという証言などがあります。

前述の墓標は所々欠落してはいるものの、豊見城村出身者のものではないかと思われ、ます。前者は「字我那ハ」「ノバル小」と屋号らしき文字が刻まれていることから、ある程度の人物の見当はつきそうですが、一方の「ピン 當銘ウシ」という方は当時の保栄茂には同姓同名の方が多いため、誰の墓標なのか確認するには困難な状況です。いずれにしても五十年余りたった現在では、関係者による証言以外に確認する方法はありません。どなたか心当たりのある方は村史編さん室までご一報ください。

電話 八五六―三六七―  
（村史編さん室 儀間淳一）



これは貴重！

# 「村内の稲作風景」見つかる

のどかな田植えの風景。山原や八重山の稲作地帯をつい連想された方も多いかと思いますが、実はれっきとした豊見城村内の風景なのです。

写真のこの場所は字名嘉地。現在の国道三三一号沿い、農協出張所付近から撮影されたもので、まさに戦後しばらく稲作が村内で行われていたことを証明する貴重な一枚なのです。写真を大切に保管されていた上原チヨさん（字名嘉地）によると、この田んぼは自宅の南側にあり、近くの小川から水を引き稲を作っていたとのこと。

撮影された一九五〇年代前半は村内でも米作りがまだ行われていた頃で、与根、伊良波、名嘉地など糸満街道沿線の通称「志茂田原」一帯では波打つ稲穂が延々と広がり景色も壮観だったようです。事業所や店舗などが立ち並ぶ現在

からは想像すらできませんね。このように、意外な感じですが、かつては米作りの盛んな地域として史料にその名を



“豊見城はかつて米どころだった”

とどめています。

十七世紀中頃、琉球における石高を田畑別に書き上げ間切（村）ごとに集計した『琉球石高究帳（りゅうききゅうこくたかきわめちょう）』によると、豊見城間切の稲の石高は二二〇二石余。島尻では島

添大里間切に次いで第二位、琉球全体においても金武、羽地などを押さえ第六位、上位のランクにあったようです。このように古くは島尻地域の「米どころ」であった本村。

しかし、沖繩における稲作は明治以後、砂糖政策のありで衰退の一端を見せ、戦後も大干ばつやキューバ危機による砂糖価格の急騰で、キビ作転換農家が相次ぐなど米作は激減しました。戦後の村内の稲作の状況は、年二作の場合は二月に田植えを行い六月頃に収穫する一期作と、八月頃田植えをして十一月に収穫する二期作の周期で行っていたようですが、その頃から水源も乏しく年一作を余儀なくされた農家も多かったようです。

やがて村内一の田どころ、志茂田原も一九六四年、全畑地化を目的とした土地改良事業がスタート。稲作離れにもさらに拍車がかかり村内から姿を消すこととなりました。（村史編さん室 大城達宏）



# 糖畑、水田が 充滿するを...

「百五年前の日記」から

今から百五年前の明治二十二年（一八八九）一。当時の豊見城間切を巡回した日記が発表され、静かな話題となっています。

日記を記録していたのは、明治二十一年に東京から赴任し沖縄県庁に勤めていた埜（はなわ）忠雄氏です。

「本嶋巡回日記」となっているが、小禄、豊見城、兼城など現在の南部市町村をまわり、主に埋葬や衛生状況を視察調査するのが目的であったようです（温故業書 第四十九号）。内容を抜粋し、ご紹介します。

一日目（明治二十二年十二月二十九日・日曜 曇）小禄間切巡回。

二日目（三十日 雨）午前九時小禄番処出発、カゴにて午前十時豊見城番所着（途中にて新垣大吉・地頭代）に逢う。同村の仲（屋号？）方へ投宿。十一時より金武原（チヌハル）に至る。石橋という眼鏡橋あり（但し塩水な



り）。ふりかえると、豊見城の古城が見える。道路はすべて敷石されている。

金武原毛（現在のNHKタワーの一带）から奥武山、那覇をのぞむ（文子Ⅱ番所の書記Ⅱの案内）。ここは高い木はなく草原である。糖畑や水田の充滿するを見おろす。当間切には琉球人の医師・佐久本（真玉橋村に住む）という者がいる。

重病は那覇に行つて治療し軽症は山芋などを食べて治すという。

のろくもい（巫女）が八名

いる。ユタヤトキ（男のユタ）は特に見当たらない。という。仲の宿主からモチをもらった。旧曆十二月八日（二十九日なり）についたもので、キビ、クバの葉に包まれている。

三日目（三十一日 晴れ雨）。午前九時に文子の案内で字豊見城を出発、伊良波の墓地に至る。ウロイキ原という山腹一帯でソテツ、松が茂っている。

保栄茂に至る。墓地のかたわらに一人の埋葬墓地あり。山かげのサハンナ原に二人の墓地がある。ウシが原の畑中に亀甲墓があり、また一人の埋葬者がある。

掟（ウッチⅡ区長）に聞いたところ、これは天然痘患者の墓だ、という。家人は別の所に葬ることをきらつて自分たちの墓の隣に埋葬しているとのことである。

雨が降ってきたので、保栄茂の村屋（公民館）に休息した。正午すぎに翁長の座安辻原に行く、畑つづきの山かげに一人の墓標がある。

昼食のあと文子と分かれて兼城番所を過ぎて糸満に至る。

村史編さん室

宜保喜久



## 280年以上も前から 拝まれている祠ほこら

最近戦前の真玉橋の一部が発掘調査で姿を現し、新聞に取り上げられるなど話題を呼んでいますが、皆さんは「真玉橋由来記」という芝居をご存じでしょうか。一名「七色元結」といえば知っている方もいらつしやると思いますが。

真玉橋の架橋は難工事で、なかなかはかどらないところへ、一人の神人が「子年生まれの七色の元結（髪を束ねる細いひも）をしている者を人柱にすれば、工事は成功する」というお告げを役人に話し探させるが、該当者は見当たらず、結局言い出した神人が当



今も伝承され拝まれている祠（現在は、真玉橋梁工事のため字の集落寄りに移されている）

の本人であることがわかり人柱にされた。という内容です。これは作者の平良良勝が本土の「長良川の人柱」という芝居をもとに書いた作品で、昭和一〇年頃初めて上演され、以来人気作となりました。そのせいかこれを実話と思っている方も多く、この真玉橋の発掘の話題になると「やつぱり人骨も？」という声があびたび聞かれます。なかには橋のたもとにある祠を、その神人を祀つてあるものと思ひ拝んでいる方もいらつしやるようです。

しかし、これは戦前、橋の中央部にあった香炉を、戦後

に移動したもので、戦前は旧暦の毎月一日・十五日に字真玉橋の役員によって拝まれていました。

一七一三年の「琉球国由来記」という文献によると、真玉橋には「コモコバシ」とう神名があり「毎月、朔日十五日、中ノ橋（真玉橋のこと）二、花、五水（酒）添テ、村中ノ人、御拝仕ル也。」と記されていることから、この頃からすでに拝まれていることがわかります。いまのところなぜ、真玉橋がこのように拝まれているのかわかりませんが、一説には拝んでいる方向（東）に橋の建設に貢献した人のお墓があり、そこへのウトゥーシ（遥拝）離れた所から拝むこと）ともいわれています。

現在では一日・十五日に拝まれることはありませんが、字の年中祭祀の時には、他の拝所とともに必ず拝まれており、皆さんの心の拠り所となっています。

（村史編纂室 儀間淳一）





# 規模や立地などに注目!

## 豊見城グスクの重要拠点説

豊見城城(グスク)は多くの謎に満ちた城です。

琉球王府の正史『球陽』によれば、三山時代、のちに山南王となる汪応祖(わうおうそ)が南京に留学(一二三九三年)し、帰国後、豊見城城を築いたと記録されています。汪応祖が山南王に即位するのは一四〇四年であることから少なくとも中国帰国から王位継承までのほぼ十年の間はこの城の築城が始まったのではないかと推測されます。しかし汪応祖が即位後も豊見城城に居たのか、大里など他の城に移ったのかは今だ謎のままです。

往時の城の規模や構造等を伝える数少ない記録としては一八五三年に来琉したペリーの報告書があります。それによると城跡は「およそ八エーカー(約九八〇〇坪)の面積を占める大規模なもの」で城壁は「防

御力を強める目的で、しばしば数列になって互いに平行をなしていた」との興味深い記述が残されています。それから推定すると豊見城城は恐らく三つの城郭からなり、琉球でも巨大な部類に属する城だったと思われまます。城の北東側を饒波川が流れ、川岸から海拔五〇以上の断崖となつてそそり立つ地形は外敵への備えにも格好の立地です。三山時代には中山の勢力下にあつた那覇を間近に睨む山南最前線の出城であつただろうと伝えられ、さらに城下の漫湖には港もあつたとも考えられて

います。

この城から山南王が生まれたいというのもそのような位置的条件や城の規模とともに政治的および経済的素地が豊見城城とその周辺に当時存在したからではないでしょうか。

三山対立説に異論を唱え新しい発想の三山史を主張する大東文化大学の生田滋教授によれば、明との交易が始まつた頃の琉球には、朝貢船など大型船が停泊できる港は運天港や泊港など数カ所に限定され、その一つである国場川河口の那覇港に最も近い豊見城城は一時期、山南の拠点だったのではないかとの大胆な説を述べています。それからしてもこの城が単なる支城でなく重要な役割を持った拠点だったのでは、という発想にも一層拍車がかかります。三山統一後は空城となり歴史の舞台から忽然と姿を消した豊見城城。今後もっと人々の関心や研究が深まってよい史跡だと思えます。



戦前まで存在した豊見瀬獄へ通ずる城門(「写真集沖繩」那覇出版社より)

村史編さん室 大城達宏



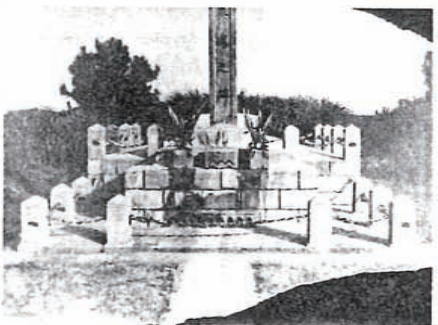
## 各字にあった慰霊塔 不戦を誓って住民が建立

沖繩戦終結後、故郷に帰った人々が、生活の再興と同時に自発的に行ったのが、遺骨の収集作業と納骨所の建設でした。

昭和二十一年二月、糸満米須地区に居住していた旧真和志村民が周辺に散らばるおびただしい数の遺骨を集めて祀った「魂魄の塔」

がその最初だと言われています。

その後、次々と部落ごと納骨所や慰霊塔が造られ、昭和三十年には県下に一八八基が建立（「沖繩の援護のあゆみ」より）されました。そのような慰霊塔が村内にも数多く存在していたことを皆さんはご存じでしたか。



字豊見城に昭和41年まであった英魂の塔

戦没者のための祭りが執り行われたようです。

昭和三十二年になると琉球政府が、那覇市識名に「中央納骨所」を建設。各地域単位にあった慰霊塔から遺骨が次々と移され、村内の慰霊塔も三十八年十二月に同納骨所へ転骨を済ませ、次第に姿を消していくこととなります。中央納骨所はその後、規模的理由から閉鎖。五十四年、糸満市摩文仁の「国立戦没者墓苑」へと二度目の転骨が行われたのです。日々の生活に精一杯であったあの時代に村民が自ら建立した慰霊塔。今、そのほとんどは現存しませんが、当時、簡素なたたずまいながら戦没者への敬けんな思いと不戦の誓いが込められていたのです。

（村史編さん室 大城達宏）

塔名	設置字	建立年月
英魂の塔	豊見城	昭二八・一〇
北琉の塔	宜保	昭三〇・五
紅葉の塔	我那覇	昭二一・九
散華の塔	名嘉地	昭二四・三
無念の塔	田頭	
英霊の塔	与根	
栄誉の塔	伊良波	昭二七・三
鎮魂の塔	渡橋名	
守島の塔	保栄茂	
戦死者の塔	翁長	
平眠の塔	渡嘉敷	
南琉の塔	上田	
上田納骨堂	平良	
万孕の塔	高嶺	
万霊の塔	高安	
無名の塔	饒波	昭三二・四
平和の塔	嘉数	昭三三・四
麦落の塔	真玉橋	
真珠の塔	根差部	
遺芳の塔	金良	昭二六・五
錦魂の塔	長堂	昭二五・五
芳魂の塔	豊見城	昭四一・三
清魄の塔 (現存)	※前記の英魂の塔、北琉の塔を改修し清魄の塔となる。	
海軍慰霊の塔 (現存)	豊見城	昭三三・一〇
山部隊 野戦病院 患者合祀碑 (現存)	豊見城	昭五七・八

※村内各字にあった慰霊塔に関する情報や写真等をお寄せ下さい。(八五六―三六七)



# 綱引きで豊年祈願

娯楽でなく神事の色濃い綱引き

旧暦八月から八月にかけて、県内各地で綱引きが行われています。綱引きは、おもに旧暦八月十五日のウマチー、二十五日のカシチー、七月十五日の旧盆、八月の十五夜に行われています。村内では多くがウマチーまたはカシチーの日に引かれ、宇保栄茂や翁長ではウマチーと八月十五日の二回行っています。

ウマチーとは、稲の収穫



五穀豊穡を祈願して行われる綱引きの様子

祭のことをいい、カシチーとは、蒸したもち米のこと、これを神仏に供える日のことです。このことから、綱引きは豊年や村の繁栄祈願の一つであると思われます。また、一八三九年の『砂糖座旧記』では、倭約のため首里など町方で綱引きが禁止された際においても「田舎においては、毎年祈願として行われており、他村との争いもなく、綱もあまり藁を使わず手間もかけていないようなので引いてもよしい」と例外を認められていたことからわかれます。

ところで、毎年十月十日に行われている那覇大綱挽が戦前まではこの時期に行われていたことをご存じでしょうか。この綱挽は、各村の綱引きのように毎年行われるのではなく、国の祝い事や新任の

薩摩役人（在番奉行）を歓迎する余興として行われ、不定期的なものでした。

この那覇大綱挽に関する資料として一八三九・一八六二年の『西東綱挽之時日記』というのがあります。これによると豊見城間切をはじめ小禄間切や国場村などから藁を調達し、そのお礼として焼酎を贈っていることが記されています。また一八六三年には藁を供出したお礼に一、八キログラムの茶が贈られています。これは倭約のため先例通り焼酎を贈ることが禁止されていたためでした。このとき石火矢橋に那覇から五艘の伝馬船が来て藁を積み出しています。

このように那覇の大綱は那覇周辺地域の藁で作られていました。なかでも豊見城からの藁の供出量が一番多く、当時豊見城が有数の稲作地帯であったことがうかがわれます。

（村史編纂室 儀間淳一）

# 1997年9月号

馬の飼養頭数の推移 (1907~1916年)

区分 年度	豊見城村		島尻郡		沖縄県	
	世帯数	馬の飼養数	世帯数	馬の飼養数	世帯数	馬の飼養数
1907年(明治40)	1,955	1,648	25,769	12,028	99,481	29,473
1908年(41)	-	-	-	-	98,844	29,853
1909年(42)	-	-	-	-	99,491	30,472
1910年(43)	2,046	1,752	26,557	12,063	101,135	30,329
1911年(44)	2,061	-	27,042	-	102,027	31,948
1912年(大正1)	2,067	1,879	26,463	12,405	101,584	31,647
1913年(2)	-	1,506	-	11,993	102,109	27,413
1914年(3)	2,122	1,517	26,906	12,942	102,680	29,302
1915年(4)	2,149	-	27,238	14,125	105,132	30,507
1916年(5)	-	-	-	14,754	104,414	32,985

・「沖縄県統計書」より調製・乗馬用の馬は統計には含まれない

税制限選挙」であったという。また、制度上でも島尻郡長や県知事の権限が強大で地方自治は狭い範囲にとどまった。当時の新聞は「沖縄県及び島嶼町村制は、従来の間切島制度に、制服を着せた程度だ」とその内容を批判し、皮肉ったものである。ともあれ「豊



## 豊見城村の“馬力”

一九〇七年(明治四〇)三月の勅令第四六号で「沖縄県及び島嶼町村制」が公布され、翌年四月一日から施行された。それによって「豊見城間切」が「豊見城村」に、間切長が「村長」に改称された。当時の村長は島尻郡長の推薦を経

て沖縄県知事が任命したが、助役の制度もなかった。また、村会(村議会)はあったが、村長の権限が強く今日の議会制度とは程遠いものであったようだ。村会議員の選挙も直接国税二円以上を納めた者に限られ、いわゆる「納

見城村が誕生」した記念すべき四月一日である。しかも、平成十年は村制施行九〇周年に当る。「一〇〇周年の大きな節目を記念して」と一般に考えられがちですが、実はその前に「市昇格」がプログラムされており、村制一〇〇年は永久にめぐって来ない可能性が大きい。

ところで、九〇年前の村制スタートのころの状況を統計の数字でのぞいてみよう。特にわが村の“馬力”というか、活力が想像できる「馬の数」を取り上げてみた。

馬は当時の農村社会においては、トラクターや耕運機、農業用トラック、サーター(製糖)ヤアの動力源に匹敵し、さらに糞尿は肥料になり、農業生産の質、量を左右する重要な家畜であったと思われるからである。

そこで豊見城村・島尻郡・沖縄県の世帯数と馬の飼養頭数の統計表を掲げた。年によっては数字が欠けているので、仮に村制施行三年目の一九一〇年(明治四三)の欄を参考にすると、豊見城村の総世帯数二、〇四六に対し、馬の数が一、七五一頭(八五・七%)、島尻郡全体で二六、五五七世帯に対し、馬二一、〇六三頭(四五・五%)、沖縄県全体で世帯数一〇一、一三五に対し馬三〇、三一九頭(三〇%)という割合である。

本村は、馬の飼養頭数において県内一であるが、ちなみに二位以下は次の通りである。

西原村一、二四九頭、東風平村一、二三八頭、中城村一、一八七頭、玉城村一、一五〇頭、北谷村一、〇三三頭で、あとは一、〇〇〇頭未満となっている。

村史編集室 宜保喜久



## 「村陸上」

去る九月に行われた村陸上競技大会は今年で開催五十周年を迎えました。

そこで今回は、半世紀の歴史を積み重ねてきた戦後村陸上の「夜明け」と、それ以前のあゆみを取り上げてみました。

戦前の陸上競技大会についての記録はほとんど残されていませんが、その頃は村内に二つあった小学校、一豊（現在の長嶺小学校）二豊（同座安小学校）のそれぞれで、校区ごとの競技会が開催されていたようです。

当時、娯楽や余暇の少ない農村社会にあつて、陸上競技の気持ちは高く、字對抗あるいは大字對抗の競技方式も手伝つて、人々の熱の入れようは相当なものだったようです。

各校区での競技会終了後には、優秀競技者がそれぞれ選抜され、さらに村で記録会を行い村代表を決定、東風平の明治記念運動場で行われた鳥尻郡大会へ派遣されたそうです。当時、村の名

## 戦後初は 与根で開催

譽を担つて出場する代表選手に対しては、栄養をつけて頑張ってもらおうと、村から食事が与えられたり、ときには日当が支払われることもあつたようです。

つい最近まで、各（大）字で



ここで戦後初の競技会が開かれた（字与根・金城商店裏）

行われていた大会本番前の「栄養会」なる結団式もその名残ではないかと思われま

す。しかし、このような歓喜に満ちた大会にも次第に戦時下の影響を受ける時期がやってきました。

太平洋戦争に突入する頃からは「国防競技」と呼ばれる新種

目も登場、投てきの距離を競う模擬手榴弾投げや一本の網を十名ほどの人数で握り、数キロの距離を駆け足で行軍する競技。これなどは一人でも落伍者が出ると大変です。他にも俵かつぎ競争や女子による砂の入ったバケツリレーなど戦時色の濃い種目が競技の中心を占めるようになってきました。

昭和十四年には、東京の明治神宮外苑で行われた全国大会に、沖縄代表として本村から初めて、字饒波の金城選手が土のう運搬競争に出場したことは現在でも当時を知る人々の間で有名です。

戦争が終わり、帰村した人々の生活もようやく軌道に乗り始めた昭和二十一年に、戦後第一回目の村陸上は再開されました。

その場所は、字与根集落内の広場だったと言われています。苛酷な戦場を生き延びた人達が「生きていく喜び」「平和」を一身に感じた競技会だったに違いありません。

その後、村陸上は「青年運動会」と愛称され、全村規模の大字對抗方式で、主会場も座安小学校、豊見城中学校、そして総合運動競技場と変遷し、現在に至っているのです。

村史編纂室 大城 達 宏

筆算稽古を積んだものが番所役人の各役を経て最後に地頭代になった、ようである。地頭代の印鑑は約三〇〇年前からあったとも考えられるが、ここに掲載し

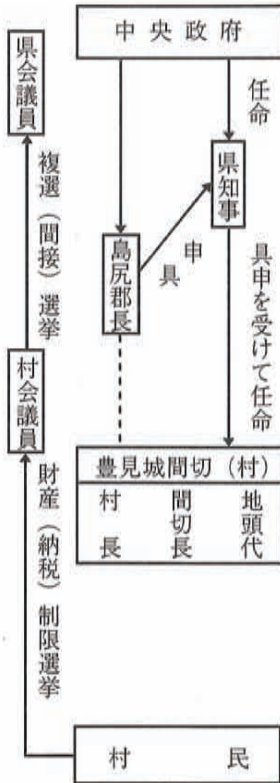
**村長は  
県知事が任命**

地頭代、間切長、村長もこの時代までは、左の図のように、島尻郡長の推薦を受けて県知事が任命するシステムであった。

豊見城間切地頭代の印はタテヨコ一・四センチ角の小さいもので、現在の村長印の二・四センチに比べても一センチも小さい。間切長の印鑑も、地頭代のと比べあまり変わりはない。

この間切長の時代に個々の村民に深く係わりのある制度改正が行われた。例えば、日本国民の三大義務の一つ

**豊見城間切（村）の首長  
（1880—1908まで）**



※沖縄県史2政治（各論編1）を参考に図化した。

であった「徴兵検査」の実施（一八九八年）、農民がはじめて個人の所有権を認められた「土地整理事業の完了」（同年）、宇豊見城小学校を、現在の長嶺小と座安小の二校に分離したなどである。

この時代の改革によって人々の意識も活動もずいぶん変化し、とまどいながらも大きく進化した時期として位置づけしてよいと思う。

ところで、この間の村議会は、どうなっていたのだろうか。前半の地頭代時代には、豊見城間切協議会が設けられたことになっているが審議の内容やその権能はあまりよくわからない。

当時の県例規集を見ると議員ではなく、会員となっていて、地頭代が議長を兼ねて会議を進めたり、協議で決まった事項を取り下げ

させたり、または決定事項にあまり拘束されない規程が多く、地頭代の相談機関という性格が強い。

**村議会の  
前進は間切会**

また、間切長の時代になると、間切会という機関現在の村議会の前身が設置される。

一応、議員選挙に関する規程もあるが、選挙は行われることなく、議員は一部の村役員たちの話し合いで選んでいた、といわれている。

この時期は、豊見城村が発足するまでの過渡期であり、行政機構も政府の沖縄施策に左右され揺れ動いたことが想像できる。（以下は四月号につづく）  
村史編纂室 宜保喜久

**豊見城村制施行90周年記念事業**

- 4月15日 記念式典 豊見城村立中央公民館（大ホール）
- 祝賀会 豊見城村立中央公民館（中ホール）
- 記念誌発行
- 4月15日 小・中学生作品コンクール展示会 豊見城村立中央公民館（談話ホール）
- 4月22日
- 4月16日 特別展（戦前・戦中・戦後の写真）豊見城村立中央公民館（中ホール）
- 村PR映画（ビデオ）豊見城村立中央公民館（中ホール）
- 4月22日
- 6月28日 NHK公開番組「欽ちゃんとみんなじゃしゃべってわらって」豊見城村立中央公民館（大ホール）
- 7月19日 組踊「未生の縁」上演 豊見城村立中央公民館（大ホール）

7・広報とみぐすく

**90年のひとコマから...**

**40年前の村役所周辺**



一番奥の瓦屋根の建物が村役所。その左手前が農協で中央が配給所。さらに右下が当時村内で唯一の診療所です。役所は当時から現在地にありました。

昭和32年（1957）10月、上田小学校から撮影。



# 4月 豊見城村は 村制施行90周年

## 豊見城村の誕生(1)

### 「首長之印」でみる歴史

一九〇八年(明治四一)四月一日に「豊見城村」が誕生した。来月一日には九〇歳になる。県内の各村もほとんど同じ年であるが、村制施行九〇周年記念事業をするのは少ない、と思われる。なぜなら、他村には大きな節目の一〇〇周年を祝う機会があるからである。本村の場合は、これから四年の間には「市」へ昇格することが予定されていて今年、まさに「村制」最後の節目である。村は、四月十五日の「村制施行九〇周年記念式典・祝賀会」をはじめ、各種の記念事業を計画している。当然のことではあるが、多くの村民の参加のもとに、九〇年の歴史を共感し、互いに未来を語り合える場にしたいためである。

さて、「豊見城村の誕生」と大きなタイトルを掲げたが、歴史を正面から取り上げるには紙面が足りないし、第一に書く方も、読む側もカタクなる。そこで現在の「豊見城村長之印」に相対する「地頭代之印」「間切長之印」「村長之印」を通して、一八七九年の沖縄県の誕生(廃藩置県)から一九〇八年(豊見城村の誕生)までをのぞ

いてみよう。人は、それぞれ先祖から

三七・五度の温もりのある血を受け継いでいるように、豊見城村にも先祖がある。

左に掲げた印鑑は、残念ながら実印は現存していないが、当時の古文書に割り印として押した「印影」が残っていた。

沖縄県になってから後も二七年間「豊見城間切」であったが、前半の二六年は「地頭代」、後半の一年は「間切長」がいた。「豊見城村長之印」は、一九〇八年の村制への移行の時に使った証憑である、と思われる。

さて、廃藩置県の以前の地頭代の氏名はすべて不明である。その理由は、公文書には、地頭代座安親雲上の署名になっており、退職後も「前座安親雲上」と名乗るのが一般的であるとい

#### 地頭代 廃藩置県以降 1880~1897 (旧慣の継続)

代順	氏名	就任年月	出身字
初代	嘉数安親	~明治13年(3年間)	金良
2代	赤嶺嘉親	明治13年~同15年12月	嘉数
3代	大城亀助	明治15年~同18年	金良
4代	宜保加那	明治19年~同21年	高安
5代	新垣大吉	明治22年~同24年	根差部
6代	赤嶺徳吉	明治25年~同26年	真玉橋
7代	赤嶺金徳	明治26年~同29年4月	金良
8代	新垣蒲太	明治29年~同30年4月	長堂

#### 間切長 1897~1908年「沖縄県間切島吏員規程」施行による

代順	氏名	就任年月	出身字
初代	外間安徳	明治30年4月~同35年5月	高安
2代	座安徳成	明治35年6月~同39年9月	鮫波
3代	具志保門	明治39年10月~同41年3月	豊見城

#### 首長の印鑑



地頭代之印

1880(明治13) - 1897(明治30)



間切長の印

1897(明治30) - 1908(明治41)



村長の印

1908(明治41) -

※地頭代、間切長、村長の印影は、村の文書に割印として押されたものをつなぎ合せた。

うように職名、または名譽称号でもあったのだろう。地頭代の制度は、かなり古く薩摩藩の琉球討ち入りのあった翌々年の一六一一年に士族の按司掟に替えて、地方役人の最高責任者である「地頭代」に間切内の納税や風紀など指導・監督をさせていた、と考えられている。地頭代は、間切内の百姓から首里の豊見城御殿や豊見城殿内に奉公して筆算稽古を積んだものが番所役人の各役を経て最後に



## 豊見城村の誕生(2)

### 初代村長は自由民権運動の旗手

一九〇八年(明治四一)四月一日に沖繩県島嶼町村制という勅令(第四六号)が施行されて「豊見城村」が誕生した。

同時に各役職名や機関の名称も次のように変わった。

豊見城間切→豊見城村

間切長→村長

間切島会→村会

その他、役場職員の職名も変わった。

しかし、この制度は沖繩県と東京の伊豆七島や小笠原島だけに適用された特別町村であった。

沖繩県の各市町村が他府県なみの自治体組織や村議会の機能が認められるのは、十二年後の一九二〇年(大正九)になってからである。

村制施行の年に生まれた人はいま九〇歳である。一人の人生からみて九〇年は短いと思うか、長いと考えるかは各人の人生観、社会観によって異なると思われる。

村制の九〇年も同様である明治四一年から大正九年までは先に述べたように特

別町村であって、古い琉球王府時のしきたりが受け継がれ、名称は村長、収入役書記、あるいは村会と変わったが選出方法も一部の人たちによる話し合いで決められた、といわれる。

一九二〇年(大正九)になって本土並の自治制度が認められ、村長を補佐する助役が配置された一方、村会の議決範囲も拡大されて権能が充実してきた。しかし、戦後の議会制度とは大きな違いがあった。村会議員を選挙する有権者は二五歳以上の男性だけであり、初期のころには納税額によって投票の価値が違うなど前近代的な段階であった。

一方、社会面をみると豊見城村はサトウキビ、イモ、米、カボチャ、豆類などを生産する純農村であった。本村周辺の動きをみると、まさに本村の文明開花という表現が理解できると思う。

例えば、字真玉橋の対岸に県営鉄道と那原線の「真玉橋駅」が開所(一九一四年)、

第一回国勢調査で村人口九五〇二人一、〇六二世帯(一九二〇年)、小禄飛行場の開港(一九三六年)がある。また、一九四〇年(昭和一五)には日本の富国強兵、精神作興をうながす紀元二六〇〇年祭が、豊見城村でも盛大に行われた。

村内の各門中墓にある忠魂碑は先の日露戦争や支那事変などで戦死した人々の顕彰碑であることは、建立年月日でわかる。

さて、話題を九〇年前にもどして、初代村長の具志保門について考えてみよう。

具志保門は、県知事から最後の豊見城間切長に任命され村制移行に伴って村会の推薦によって初代村長に選任される。

しかし、具志保門の経歴は不明であり、写真も発見できないナゾの多い人物である。

金城盛兼氏(豊見城村史・一九六四年発行の編纂人)は具志保門は字豊見城の資産家で裕福な家庭に生まれ、豊見城小学校を卒業と同時に選抜されて当時の豊禄兼学校に進んだ秀才であった、という。

卒業後の経緯はわからないが一九九五年ごろから謝花昇、当山久三、新垣弓太郎らと共に沖繩の自由民権運動ともいえる社会運動の旗手となって活躍する。

当然であるが、奈良原知事や沖繩の旧支配層と、山林払い下げ問題や共有金問題、選挙制度をめぐって激しく対立し、敵対関係にあった。このことは当時の琉球新報の記事にも伝えられている。

初代豊見城村長・具志保門の経歴については、謝花昇研究の立場からも重要な位置にあるとして、研究者たちも関心を寄せている。

国の沖繩施策や諸制度が変わる過渡期には、理解できない事象もあると思われるが、具志保門についてみると、ロマンティックで情熱的な行動派であったと思われる。同時に対立してきた相手から自治体の代表者(間切長)に任命されるという人物像は、ミステリードラマを途中から読まされた気分である。

豊見城村の現代史を解明するには、初代村長時代の社会情勢、政治環境、経済の状況など細かに研究する必要があり、今後の課題である。

村史編纂室長 宜保喜久





## 一反当たり那覇に次ぐ生産高！ 与根マース

我々が生きていくうえで欠かせないものに塩があります。最近では健康食ブームや塩専売法の廃止によつて、シママースが見直され注目されています。

沖縄では当初、海水をそのまま料理に用いたり、または海水を直接焚いて塩を得ていました。それが塩田において塩を作るようになったのは、一六九四年に若狭の宮城という人が、薩摩の弓削次郎右衛門という人物から入浜式塩田いりばまじきによる製塩法を習い受け、那覇の潟原かたはらで実践したのが最初といわれています。

入浜式塩田による製塩法とは、塩田内にまいた砂に海水を付着させ、日干して乾燥した砂を集めます。これに海水をかけると砂に付着した塩分が溶けだし濃い塩水が得られます。これを煮詰めて塩を結晶させるというものです。

マースといえば本村の与根が有名ですが、ここは戦前から製塩業の盛んな地域で、ここでできた塩は「与根マース」といわれ、沖縄市泡瀬の「泡瀬マース」とならび県内ではよく知られています。与根が製塩地として登場してくるのは一九〇四（明治三十七）年の『沖縄県統計書』で、塩田面積二町（六千坪）、竈数かま三〇、製造高七五六石と記されています。

この年の一反（三百坪）当たりの塩生産高をみると、那覇が約四十四石と一番多く、与根は約三十八石と那覇に次ぐ生産高となっています。三番目に多い泡瀬が約十九石と約半分となっていることから、与根の塩田が良質であるとともに高い製塩技



昭和3年の与根の塩田図(財)塩事業センター所蔵)

術をもつていたと思われる。また、一九〇八（明治四十一年）年に大蔵省専売局が発行した『大日本塩業全書』という本には「琉球の南部には現在、豊見城間切の米原（与根のことか）と糸満村に数反（約千数百坪）の塩田があるだけだが、小禄間切の大嶺村から糸満村までの沿岸約一里（四キロメートル）の間は、干潮時には幅十町（一キロメートル）から十二町（一・三キロメートル）の広大な砂地があり、今後塩田として開拓すれば、三十万坪余りの塩田になりうる将来有望の地である」と記されています。当時、与根を含んだ小禄間切の大嶺村から糸満にかけての海岸が塩田に適した立地条件を備えた有望な土地であったことがわかります。

塩田面積はその後、一九一四（大正三年）に五・七町（一万七千坪）に増えただけで、大規模な塩田開発は行われませんでした。泊や泡瀬と肩を並べるまでにいたり、与根は塩の産地として知られるようになりました。

※一石は約一八〇リットル  
（村史編纂室 儀間淳一）



## ジョン万次郎は「甘党だった」



ジョン(中浜)万次郎

本村にゆかりの深いジョン(中浜)万次郎が亡くなってから一〇一年になるが「名前には聞いたことがあるけど、ジョン万は、どんな人？」と聞かれて一瞬返事に困ったことがある。ひとくちに説明できないのである。そこで、次の様に羅列した。

現在の高知県土佐清水市の出身。幕末の一八四一年に仲間五人で出漁して遭難、無人島で生きのびているところを米国捕鯨船に救助される。うち四人はハワイで下船し、十四歳の万次郎少年だけは船長に見込まれ、見習い船員となる。後に米本国の船長の郷里に行き、そこで小学校、高級船員を養成するアカデミーを卒業し、最先端の航海術や高等数学などを学ぶ。最終的には捕鯨船に乗り、一等航海士、副船長となる。

約十年間のアメリカ滞在の後、一八五一年(二十四歳)に帰国、琉球国摩文仁間切小渡浜(現在の糸満市大渡浜)に上陸。旧暦一月四日未明から七月十

ジョン万次郎』と述べている。この話は中浜家のお手伝いさんも指摘していたようであるので、並の甘党ではなく「超甘党」ぶりがうかがえる。

やはりアメリカ生活十年の間に身についたケーキの味覚が忘れられなかったのだろうか。

ところで、一八五一年、本村字翁長に滞在中に、当時の琉球国王尚泰から万次郎ら三人に対し、一斗の焼酎(泡盛)が賜られているが、甘党の万次郎も飲んだかどうか。せっかく国王から頂いたのだから、ありがたく一杯は飲むのが礼儀だから当然であるが、なにせ一升ビン十本という量である。今後の身の不安、望郷の思い、なつかしい肉親など、寂しさやもどかしい気持ちをしずめるために草深い字翁長の高安家で月を眺めながら泡盛をすすったのだろうか。

村史編纂室長

宜保喜久

一日まで本村字翁長の徳門(高安家)に軟禁される。薩摩、長崎を経て故郷の高知県土佐清水市に帰ったのはそれから一年半後である。このあとの万次郎の活躍や業績の話などは一気に語ると息切れする。ちようど万次郎が帰国した前後は、日本は幕末の動乱の最中であり、米国や西洋の近代文明を吸収して帰った、という時代背景を想像すると、万次郎の立場が理解しやすいだろう。さて、万次郎は日記や自叙伝などを残していないので、人物像が鮮明ではないが、身近な人々の伝えるエピソードのいくつかが知られている。その一つに「万次郎は超甘党であった」という話がある。これは万次郎の娘寿々(すず)が「好物は、おかゆに白砂糖をまくのではなく、厚く敷いて食べた」(中浜淳著『私



## 真嘉部は

# 吠の産地だった

去る一月十二日から、村内の製糖工場が操業を開始し、各地でサトウキビの刈り入れ作業が見られます。

砂糖(黒糖)は、一六二三年に中国の製糖技術が伝えられて以来、沖縄の主要な農産物のひとつとなりました。

戦前、各字で作られた砂糖は、樽に詰められ那覇に集積されました。そこで検査を受けた後、樽を保護するために吠かますで包んで本土に出荷されました。実はこの砂糖の入った樽(砂糖樽)を包む吠は、当時、字嘉数、真玉橋、根差部の特産品で、字嘉数では次のような歌を聞くことができました。

「嘉数真玉橋根差部と三村、三村のアンゲワー達ミムラカマジーチユクが、揃スグとーていー吠かます作ウツいるあらし、シビすぐんなよー、むとうかんにゅんどー」。内容は、三村の娘たちが揃い競い合つて吠を作っている。藁わらしべを削ぎすぎると(藁が細くなり、それだけ多くの藁を使うことになるので)元も子もないぞ、

という意味です。

これは「小禄豊見城」ウルクトウミンシキ

で始まる「三村節」ミムラフシの

替え歌で、嘉数、真玉橋、

根差部の特産品である

吠を歌ったものです。

この吠は、三カ字で農

家の副業として戦前まで作

られていました。材料には

藁を使いますが、この地域

には水田が少ないため、玉

城村の船越の藁を使ってい

たそうです。出来上がった

吠は十四〜十五枚ずつ束ねて、

那覇市の旭町辺りにある会

社に出荷されました。

ところで、一八七一(明治

四)年の大里間切の番所の

日記には、この年の八月、

各間切の地頭代(今の市町

村長に相当する)が、砂糖

を出荷するときに必要な吠

藁わら小縄こなわを諸間切で調達する

ことになった。しかし、そ

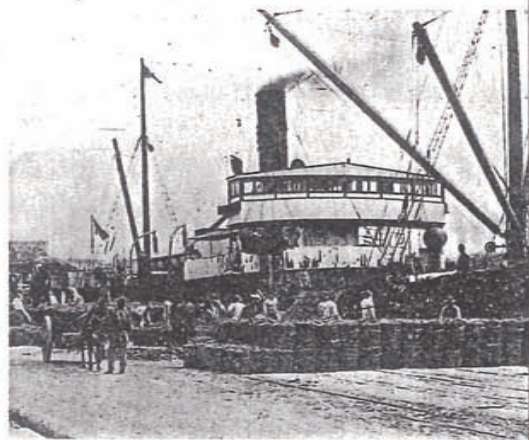
れは難しいので、豊見城間

切で作ったものを買い取るか、

王府の役所で調達して、そ

の代金を諸間切に支払わせ

るようにしてほしい、と願



当時の那覇港での積み出し風景  
(吠で包んだ樽が積まれている) (那覇市・金城氏提供)

い出ていることが記録されて  
います。

吠藁小縄というのが、前の  
砂糖樽を包む吠と同じ物であ  
るかどうかはわかりませんが、  
砂糖を出荷するとき用いて  
いたようです。この記録から  
豊見城間切には、吠藁小縄を  
上手に作る人が多くいたこと  
がうかがわれます。

いずれにしても、先ほどの  
三カ字の吠の話や大里間切の  
記録から、豊見城が古くから  
製糖業に深く関わってきたこ  
とがわかります。

(村史編纂室 儀間淳一)



## 「ピン」から「保栄茂」へ

ことばは文化であり、時代とともに変わる—といわれる。集落名の呼び方(呼称)や文字による表記にも、移り変わりの跡がみられる。

例えば、本村の字名には、柄良—カララが「金良—かねら」に「根差指部—ニサシツプ」が「根差部—ねさぶ」へと変化した形跡がある。また、難読・珍名として名高い「ピン」―「保栄茂(ほえも)」については、あまりの極端な変化ぶりに戸惑うばかりである。

正式の集落(字)名は、古くから「保栄茂」と書いて「ピン」と呼んでいる。しかし、なぜ漢字の三文字を「ピン」と二音で読むのか、と疑問を抱いている方は多い。なかには、音韻の変化(なまり)によって「保栄茂・ほえも」が「ピン」へ変化したのでは、と見る人もいる。特に地元の方たちにとっては「古くから今日まで『ピン』と名乗っているのに、外部から『ほえも』と呼ばれるのが気になる」という。

ところで、村史編さん室にも「ピンの地名」に関する問い合わせがあるので、古文書などにはどのように表記されてきたかを考えてみた。紙面の都合で詳しい説明はできないが、要約するとおおよそ次の三点を指摘することができる。

①むかしはどのように発音していたか確かめようもないが、

「ピン」または「ボヘム」と呼ばれていた。②次に、ひらがなでは「ほへむ」と書いた(例 おもろそうし・巻八ノ五)。③さらに、「ほへむ」に「保栄茂」の漢字を当て字した。という仮説である。「ピン」という集落名は、文献資料ではみつけれない。「ほへむ」という表記は、一六二三年に編集された古歌謡集・おもろさうしに初めて登場する。ここで注目したいのは、濁音の「ほへむ」ではなく、清音の「ほへむ」となっている点である。おもろの時代から近代まで、ひらがなの濁点を省略する慣例があったのは周知のとおりである。

漢字で「保栄茂」という目出たい当て字が付けられたのは、一六三五年―一六七〇年ごろと推定できる。この時期は薩摩藩の討ち入り後で、琉球の各間切名や村(字)名がひらがな書きから大和風に漢字へ改められ、それが定着する時期であった。つまり「慶長検地」や「寛文盛増」「琉球国石高究帳」「郷村帳」などの土地測量、石高台帳または絵図面の調整がなされており、その際に漢字化された、と考えられる。

歴史的にみると、まず、「ピン」「ボヘム」という固有名詞があり、おもろ人たちは濁音をはぶいて「ほへむ」と書き記した。さらに薩摩役人の指示で王府役人らが「保栄茂」の三文字を当てた。

つまり、音韻の変化に加え、人為的な変化も大いにあった、との見方である。

村史編さん室長  
宜保喜久



## 天皇の侍従が視察 農業模範集落 字長堂

先日、沖縄戦に関する聞き取り調査を字長堂で行ったときのこと。戦前の字のようすを聞き込んでいく中で、参加者から次々と「天皇の侍従が長堂を訪れ農作業を視察した」という話が飛び込んできました。

この出来事とは、昭和十七年に来県した小倉蔵次侍従による「銃後産業視察」のことでした。

当時の大阪毎日新聞（沖縄版）によると、侍従は七月十一日空路来県、十八日までの滞在期間中、県内の主だった産業の先進実情を視察する旨が掲載されており、その日程先に「豊見城村字長堂産業組合連合会」の名前が他の先進地（団体）と肩を並べ紹介されていたのです。

長堂はその頃、農業の盛んな字として名を馳せており、集落内には県派遣の農業技手も駐住、農業訓練所（現・南農敷地）も隣接し好環境であつたようです。

視察は折しもミッドウエー

さらに興味深い記事がその五カ月前、同紙に掲載されています。

「長堂では昭和九年ごろ農事改良普及組合が共同作業を始めた。これが本県最初の日の丸作業である。この地域の特徴は、芋の一斉収穫と訪問時間の制定で、昼食後の一時間訪問時間に当てられ、この際に色々な用件を済ましそれ以外は面会謝絶である。芋は十日分づづ収穫、各戸の収量も優劣なくよく揃つてゐる」

凄まじいまでの奮励ぶりが伝わってきますが、その県内初の日の丸作業実施といい、侍従の視察受け入れといい、戦時下とはいえ、いかに当時の長堂が農業の模範字であつたかが伺われるエピソードです。

（村史編さん室 大城達宏）

海戦で海軍が敗北を喫し（六月）、次第に日本が守勢に変わり始めようとする時期でした。食糧増産が叫ばれ、特に甘藷（さつまいも）増収のため平地植えから畝立て植えへの転換や優良品種の普及などが強力に推し進められました。長堂ではいち早く奨励品種だった沖縄百号を導入、ほとんどの農家が畝立て植えを実行するなど、まさに農業の模範集落だったので。

さらに増産運動の最中には報国精神の高揚を目的に作業中の畑に日章旗が立てられました。当時は日の丸作業と呼ばれました。

人々の証言などによると侍従は十三日来訪。男は国民服、女はモンペ服をそれぞれ着、頭には白鉢巻を締めた格好で畝掘り作業を披露したようです。ムラヤーでは侍従が見守る中、あらかじめ決められた設定に沿って座談会も行われました。その間、子供たちは家からの外出を固く禁止されたそうです。



## 瀬長島でハーリー 島民の一致団結のために

毎年旧暦の五月になると、県内各地でハーリー（爬龍船競漕）が行われています。

このハーリーの起源について、首里王府がまとめた「球陽」という記録では、久米村の中国系の人達によって伝えられたという説や長浜大夫という人物が南京に渡った時に習ったという説ともに、次のようなことが記されています。

「南山王の弟である汪応祖という人物が、南京へ留学した時に龍舟の競漕を見て大変感動した。帰国後、豊見城の地に城を築き居住した。この時に汪応祖は、中国の龍舟をまねて造り、五月の初めに那覇江中（漫湖）に浮かべて楽しんで」

現在、旧暦の五月四日に字豊見城で行われているハーリー御願は、これに由来するといわれています。これまで村内ではハーリーに関する行事はあっても、実際に爬龍船の競漕は行われていなかったと思われていました。しかし、戦前の一時期ではありますが、字瀬長でハーリーが行われていたようです。

当時の字瀬長では農業の他に漁業も営まれていました。ハーリーがあるのは珍しいことではありませんが、瀬長島の場合、他の地域と違い旧暦の五月四日ではなく、新暦の五月十七日に行われていました。もともとこの日は那覇市の波之上宮で波之上祭があり、瀬長島の若者達は皆、この祭り見物に出掛けていたそうです。しかし、昭和十六年に太平洋戦争が始まると、このような非常時に祭りに浮かれるのはよくないという風潮になり、そこで若者が波之上祭に行くのを止めさせ、島民の心を一つにするために、五月十七日に島でハーリーを行うように

なったということです。

瀬長島のハーリーは、集落を西・東・中に分けた三組対抗で、各組のサバニには十三才位から六十才位までの男性が八名ずつ乗り組み、島の北約千メートル離れた沖合から島に向かって漕ぎ出したそうです。勝負は一回限りで、これが終わると浜辺で角力をとったり、魚料理を囲んで酒宴が催されました。当日は瀬長島の住民だけでなく、字田頭や与根などからも見物人が訪れ、多くの人達が見守るなかで行われたそうです。

この瀬長島のハーリーは、米軍が上陸する前年の昭和九年まで続けられました。島民の意思統一のためにハーリーが行われたのは、村内で唯一半農半漁の集落であった瀬長島ならではのことでないでしょうか。

（村史編さん室 儀間淳一）



## “迫撃砲の緊急輸送を”

### —海軍司令部の終末—

今年もまた「六月二十三日」の  
その日がめぐってくる。

今月は、字豊見城の海軍司令部  
(壕)跡と関連のある沖縄戦末期  
の海軍電報(防衛研究所図書館所  
蔵)資料を紹介します。

沖縄守備の日本軍は、陸軍を主  
体とする第三十二軍(司令官 牛  
島満中将)が配備され、海軍の沖  
縄方面根拠地隊(大田實少将 約  
一万人)はその指揮下におかれて  
いた。

海軍部隊は、小禄飛行場と旧小  
禄村・本村字豊見城一帯に陣地を  
構え、廃棄された艦船から取り外  
した旧式砲や迫撃砲で武装した部  
隊で、多くの兵員はヤリを持って  
いたという信じがたいほど貧弱な  
装備であった。

ここに取り上げた海軍電報は、  
第三十二軍も首里を放棄して南部  
の喜屋武・摩文仁へ撤退し、小禄・  
豊見城一帯は米軍に包囲され、孤  
立し始めた時期に打電されたもの  
である。

発信・五月三十一日午後三時三  
〇分 発信者・沖縄方面根拠地隊  
司令官(大田實少将)

あて先・連合艦隊参謀長

「沖縄所在海軍部隊は既に最精  
鋭四個大隊及び迫撃砲全力を陸軍  
の指揮下に入れ、海軍に随行し得  
ざる状況にて、小禄地区死守の配

備に就きあるところ、槍隊を主力  
とする部隊なるを似て戦力著しく  
低下しあるも、未だ陸軍に運び切  
れざる迫撃砲弾三〇〇〇発あり。  
今ここに迫撃砲十門の夜間空  
輸を得なば大なる戦力を發揮し、  
之が切迫せり。至急ご高配を得た  
し、投下の位置は糸満飛行場(筆  
者注・現国道三三三号線沿いの字  
翁長から字伊良波・名嘉地境界付  
近まで一八〇〇Mの滑走路)写真  
の北寄りの平地(現在の自動車学  
校付近か)を可とす」以上が全文  
である。

大田司令官は「切迫せり」や  
「至急御高配を」と緊急事態を  
訴えているが、空輸が実行された  
のは九日後の六月八日であった。

六月八日午前二時十二分から三  
時三〇分に挺身空輸作戦を執行し  
た。長崎の大村基地を発進した陸  
攻三機は手りゅう弾などの武器を  
塔載して沖縄本島南部上空への進  
出に成功した。しかし、一機は投  
下直前に撃墜され、残りの二機も  
火災や砲撃のために目標地点を確  
認できないまま投下した。この空  
輸作戦は失敗に終わり、海軍部隊  
には一発の武器も届かなかった。

米軍側の資料によると、六月八  
日深夜の日本軍機の投下物は、旧  
糸満町南部に落下したと記録して  
いる。したがって、投下地点から



昭和20年12月撮影(米軍)

南に約七キロもはなれた米軍の支  
配地域へ投下されたことになる。

海軍沖縄方面根拠地隊の大田司  
令官は、この空輸作戦の前日にあ  
たる六月七日「沖縄県民カク戦  
リ」という有名な海軍次官あての  
長文を打電し、連合艦隊参謀あて  
に「小官の報告ハ本電ヲ似テ終信  
符ヲ打ツベキ時機ニ到達シタルモ  
ノト判断ス」と海軍部隊の最期を  
予告している。

だが、六月十一日、「陣前二よ  
う撃 弾薬尽クルマデ激闘ヲ交エ  
……」と無電を発信している。十  
三日午前一時大田司令官と参謀ら  
は、司令部壕内で自決した。

(村史編さん室長 宜保喜久)



## 未だ特定できぬ出発日

### — 村内学童疎開団 —

沖繩戦に先立つ昭和十九年、戦災を避けるため村内二つの国民学校が宮崎県へ集団疎開をしたことは村民の皆さんもよくご存じのことと思います。

昭和三十九年発刊の「豊見城村史」には、豊見城第一国民学校が昭和十九年九月八日、第二国民学校は八月二十五日とそれぞれ疎開団の出発日が記述されていますが、それを裏付ける確定的な資料はまだ探されていないのが現状です。さらには疎開体験者の間でも当然ながら記憶に若干の食い違いがあり、X日の謎は深まるばかりです。

今年、防衛庁に赴き沖繩戦資料を見る機会がありました。この件について、手掛かりとなる資料がないか調べてみました。まず疎開団が乗船した船舶名が分かっていたので、その出入港の記録から出発日裏付けの可能性を探ってみました。

第一国民学校が乗船したのは潜水母艦「迅鯨（じんげい）」。

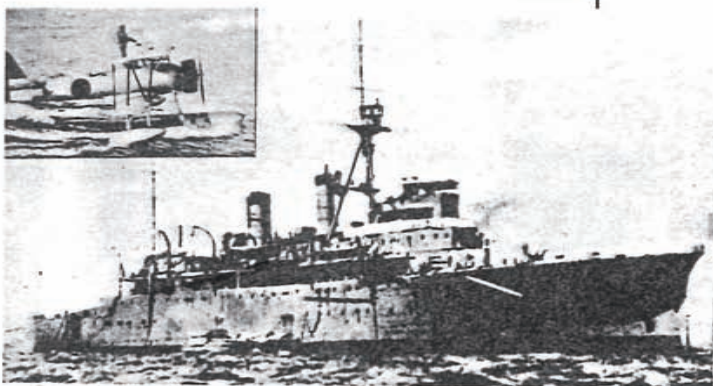
この船の「行動年表」の記述のなかに「十九年九月六日、呉（広島県）を出港、南西諸島方面輸送に従事してのち、九月十二日呉に帰港」という動きに注目し

てみました。

この頃、沖繩方面への輸送体制は、往路に物資を届け、その復路に疎開学童を乗せ本土に到着するという状況であったようです。「豊見城村史」にある第一国民学校の出発日の日付がほぼ間違いなければ「九月六日出港、十二日帰港」というこの航海の期間中に乗船した可能性がにあります。おそらく呉を出発し那覇に到着、その後学童らを乗せ一路、鹿児島へ。そこで疎開団を降ろしてのち呉に帰港したという行動を推測してみたのですが、制海、制空権とも米軍に脅かされつつあったこの時期に鹿児島間を渡るような日程で那覇へか疑問もまったくなくないわけではありません。

また第二国民学校の疎開団を乗せた輸送船「伏見丸」については、同名の船が数隻あるうえ、一般徴用船ということで行動日程等の資料は確認できませんでした。

このほか、当時、駐屯部隊の「軍旗祭（連隊創立日を祝う隊内行事）」が第一国民学校で行われる予定だったが、その矢先



— 豊児童らを乗せた潜水母艦「迅鯨」

に疎開団の出発となった—という興味深い証言もあります。

この頃、村内にいたのは第九師団（武部隊）。その配下部隊の中に、明治九年九月九日創立の歩兵第七連隊があります。同部隊が果たして村内に駐屯していたかはまだ定かではありません。

いずれにしても未だ断定できぬ疎開団の出発日、さらなる詳細な別資料や証言など突き合わせが必要ようです。

村史編さん室 大城達宏



旧暦八月十五日

“いにしえ”の世界へどうぞ



字保栄茂のマチボー (平成5年)

今月二十五日(土)・二十六日(日)に字保栄茂(びん)(富間保盛区長)と字大翁長(赤瀬真吉区長)では、区民の無病息災と五穀豊穡を祈願する豊年祭が行われます。  
両字とも毎年旧暦八月十五日に豊年祭を開催していますが、特に卯年となる今年、保栄茂では六年に一度の「大豊年祭」の年。二百年以上の伝統を持つといわれる「巻子棒(マチボー)」や数々の奉納舞踊を見ることが出来ます。  
みなさん、足を運んでみてはいかがでしょうか。



字翁長の旗ガトー (平成9年)



“保栄茂・翁長で豊年祭”  
保栄茂ではマチボーも

今月の二十四日は旧暦の八月十五日。この日の前後、沖縄県内ではジュークヤー(十五夜)といつてムラで芝居や踊り、棒術などが演じられています。  
豊見城村内では、字保栄茂と字翁長で毎年この日に豊年祭が行われています。当日は旗頭が字内を練り歩いた後、字の馬場で綱引きや余興などが行われています。  
その中でも卯年と酉年の六年ごとに行われる豊年祭は盛

大で、「ウフトウシ」または「アシビドウシ」というそうです。  
特に字保栄茂では「コー」または「龕ガシ」という葬具への奉納舞踊や、字の男性による棒術や「マチボー」という集団演技を六年ぶりに見ることが出来ます。  
一九六四(昭和三九)年に発行された「豊見城村史」によると、マチボーは字翁長や字饒波にもあったようですが、現在まで継承されているのは字保栄茂だけ

のようです。  
マチボーとは、六尺棒や三尺棒などを持った男性が隊列を組みぐるぐるを渦(うず)を巻いたり、解いたりする集団演技のことで、県内各地に分布しています。  
これには、グーヤーという巻き貝(高瀬貝)をかたどった「グーヤーマチ(読谷村字長浜)」や潮の干満をヒントにした「スーマチ(金武町字並里)」など、いろいろな種類があります。  
字保栄茂のマチボーは十三歳から五十五歳までの字の男性約二百人(前回の参加者数)が二組に分かれ、おのおの渦(うず)巻き状に円陣を組んだ後、一方の円陣を解いて、もう一方の円陣に合流し、二つの大きな渦巻きを完成させるといいます。その様子は、大空を旋回(せんかい)する鷹(たか)の群れに似ていることから、地元では「タカマチ」とも呼ばれています。  
このマチボーは人数が多いうえに複雑な動きであるため、参加者全員の呼吸が合わなければ成功しません。そのため住民の協調と融和の精神をはぐくむとともに、地域社会の心のよりどころとなっているようです。  
(村史編さん室 儀間淳二)



# 大正三元年の原勝負

——八十七年前の新聞記事から——

今から八十七年前、一九一  
二(大正元)年十一月の『沖  
縄毎日新聞』を見ると、豊見  
城村の原勝負差分式(はるし  
ようぶさしわけしき)のこ  
とが報じられています。

原勝負とは、主に農業を奨  
励するために設けられた行事  
のことで、審査員が村内各字  
を回り、農業に関することを  
審査採点し、優勝した字には  
褒賞を授与し、成績の悪い字  
には罰としてその点数に応ず  
る金銭が課せられました。差  
分式とはその審査報告会のこ  
とです。

原勝負の審査項目は、農産  
物の生産高や品質にはじまり、  
田畑や山林原野の管理状況、  
住宅地の清潔状況にいたるま  
で、多岐にわたるものでした。  
これは十九世紀の初めごろ、  
高安村出身の座安親雲上が農  
業を奨励するために、毎年旧  
暦の四月と八月に村(字)対  
抗で勝負させたことに始まる  
といわれています。

さて、冒頭の原勝負差分式

は、一九二二(大正  
元)年十一月十九日  
の午後行われまし  
た。各字の住民は、  
字の旗頭を先頭に会  
場である豊見城グ  
スク内の馬場に集合し  
ました。開始時刻に  
なると東西に別れ、  
当時の高良亀造村長  
によって開会が宣言  
されると、審査員を  
代表して嘉数氏が方  
言で審査報告をしま  
した。

続いて高良村長や知事代理、  
島尻郡長代理が講話した後、  
一等から五等までの各字に賞  
金五円が授与され、式が終わ  
っています。その後、馬の行  
列や競馬などの余興が行われ、  
午後六時に解散したとありま  
す。  
記事では「各字の旗頭が群  
舞している様は、近年稀に見  
る壮観さである」と報じてい  
ます。

原勝負はその後、昭和十年



1954(昭和29)年度総合共進会

代まで行われ、戦後は農業だ  
けでなく、教育や納税など各  
種の成績を競う総合共進会と  
名を変え、一九六〇年代まで  
行われていました。

(村史編さん室 儀間淳)



# 五十五年前の

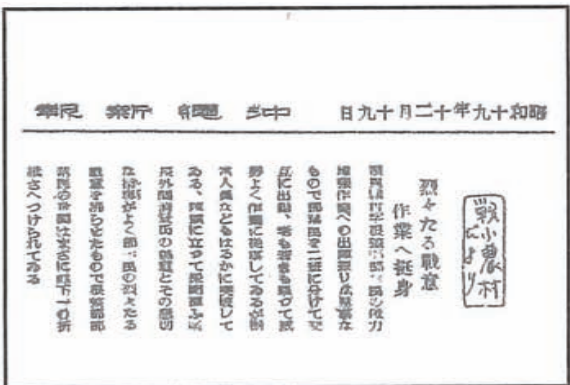
# 慌ただしい師走

昭和十九年十二月一日、沖縄決戦に備え、南部一帯の守備を担当していた陸軍第九師団、通称「武部隊」が突如、台湾へ移動した。

同年七月にサイパンが陥落、連合軍の次なる進攻は沖縄か、台湾か、日本にとって極めて重要な判断が迫られていた状況下、大本営はついに沖縄守備軍の一翼を担っていた武部隊を急遽台湾へ配置変えすることを決定した。

武部隊はこの年の七月に中国大陸から沖縄へ移駐し、主に島尻西海岸正面の守備を任せられていた。豊見城村内の各部落にも一部が駐屯し、ムラヤーや民家が兵士らの宿舍、炊事場などに利用され、敵の沖縄上陸に備えて陣地構築や戦闘準備が着々と進められていた。

一方で九月には部隊創立を記念する「軍旗祭」を豊見城第一国民学校(現・長嶺小学校)で開催し住民に参観を開放させるなど、地域への密着度も



根差部の様子を伝える「沖縄新報」

深まりつつあった。

日本陸軍きつての精強部隊と評され、守備軍はもちろん住民からも絶大な信頼が寄せられていた部隊の突然の移動は、県民の士気ばかりでなく以後の作戦計画にも暗い影を落とすこととなる。

武部隊に代わり中頭、嘉手納方面の守備を担当していた第二四師団「山部隊」がその穴埋めのため南部にやってきたのが暮れも押し迫った十二月中旬である。山部隊にとっても思いがけない決定であり、これまで手掛けてきた中部地

区の陣地を引き払っての島尻への配備だった。

さっそく字豊見城に連隊本部が置かれ、各部落で武部隊が構築していた壕や陣地を引き継ぎ、宿営設備の手配や地元との関係再構築など、振り出しに戻っての作業が慌ただしく始まった。村内は輪をかけて喧騒な年の暮れとなった。村民もまた軍への作業協力に迫られる毎日が続く。

昭和十九年十二月十九日付けの『沖縄新報』には部落民を二班に分け、老いも若きも軍の作業に従事する字根差部住民の様子が「烈々たる戦意―作業へ挺身」の見出しで紹介されている。「その敢闘ぶりはまさに県下一の折り紙さえつけられている」と積極的な協力体制を煽る紙面からは、大晦日も元旦も関係ない沖縄戦突入三カ月前の姿が読み取れる。

(村史編さん室 大城達宏)



## 時、ユタに罰金五〇銭

—百年前の「村内法」に規定—

今からちょうど百年前の明治三十二（一八九九）年に、豊見城間切の赤嶺大吉地頭代（村長）は、島尻郡役所の今西相一所長へ三十二条からなる「各村内法」を報告している。

この内法は、各集落（村）で適用している「法律」のようなものである。それを県庁からの指示で豊見城間切の八人の掟（ウツチ）が調査し地頭代が提出したものである。他の間切（市町村）も似たような「内法」を報告している。

内容は、田畑の耕作や納税、公費負担、小作料などに関する規定と、違反者への罰金。離婚の際の印形銭（インジヨウジン・結納金）の取り扱いと、違反者への強制執行。時・ユタをする者と頼んだ者に対する罰金など、農業生産から日常生活・風俗習慣におよぶ具体的な条項が明文化されている。

この時期は、沖縄県が設置された後とはいえ、まだ他府県なみに諸法令は適用されておらず、旧慣（琉球王府時代の法令・慣習）が温存され、生きていた時代である。

したがって、村内法に定められている事項は、古くからあった「決まり」を文章にしたもの、と見える。

さて、豊見城間切の村内法第十四条に「時ユタノ仕業ヲ為ス者ハ五拾銭、其レヲ信用スルモノハ十五銭ノ科金申受候事」とある（豊見城村史・文献資料編四四八ページ）

「時」というのは、男性のユタである。女性のユタと区別している理由は不明だが、とにかく「占い」に類する行為はご法度であった。

しかし、このような内法があるのを見ると「世間ではひそかにユタを信用する者がかなりいた」ということである。

なぜ、ユタを禁じるのかについては、この十四条では不明だが、王府は先に「世間をまどわす」という理由で二回も禁止令を出している（球陽）。

村内法の規定もその延長線にあると思われる。また、もう一つは「王府公認」のノロ（祝女）の存在をおびやかす恐れがあったと考えられる。

ノロは、王府の決めた年四

回のウマチーの日に間切役人や村役人、大勢の村人らを従えてウマチー（稲・麦祭り）の主祭者になり、各村落にある御嶽・殿・ノロ火神を祭場にして穀物の豊作、疫病退散、人民の安寧、国王の万歳を祈る大切な役職であったからである。

村内法があった百年前と、五十四年前の沖縄戦を境にしてノロの存在は影が薄くなり、かわりにユタの活動が自由になった。今や二十一世紀も目前、宇宙ツアーも商業化されようとするほどに科学は進歩している。しかし、人々の心に潜む不安や、正体がわからないものへの恐れ、現実の社会や生活の糧を得る職場環境など、まさに流動と、不透明の時代でもある。ユタの超能力というより、むしろメンタル・ケアを必要とする人が増えているのだろうか。

村史編さん室長 宜保喜久



## —昭和三年の与根の塩田図面—

### 『塩業整備の 基礎資料として作成』

一九九七（平成九）年四月に塩の専売制度が廃止されてから、今年で三年になります。

その間、塩は近年の本物志向や健康食ブームなどで注目されるようになり、沖縄県内でも新しいビジネスとして製塩業に着手する企業が増えていくそうです。

本村の字与根は、戦前から塩の産地として知られ、現在でも一カ所で塩が製造されています。しかし、その当時の製塩法は現在とちがって、塩田での製塩でした。

その塩田も現在では埋め立てられているため、その跡さえ見ることができませんが、当時の様子を  
知る手がかりとして、与根をふくむ県内の塩田の図面が、東京の塩事業センター塩

業資料室という所に、保管されています。

この資料は、一九二八（昭和三）年のもので、名護博物館が一九九一（平成三）年に行った製塩業に関する資料の調査によって発見・複写されました。

図面が作成された一九二八（昭和三）年は第二次塩業整

備が行われる前年で、専売局は、この年に塩業整備の準備調査を行っています。

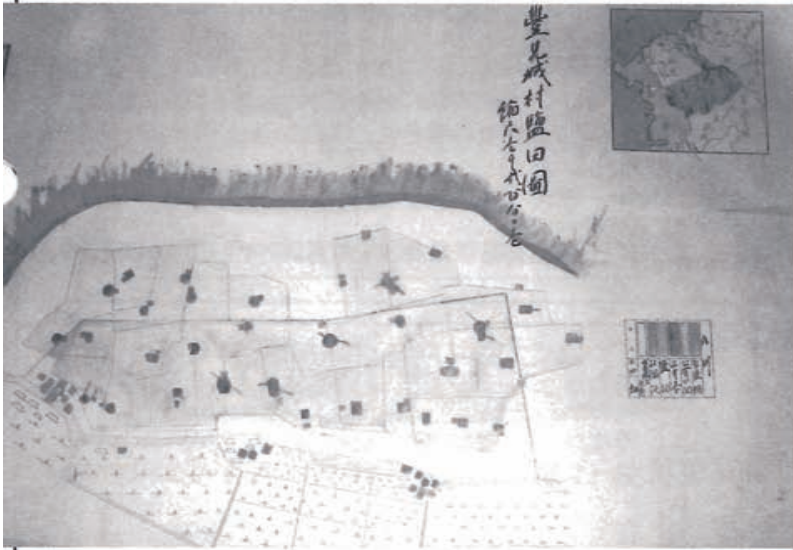
塩業整備とは、当時、製塩設備の改良や外国から安い塩が輸入され、塩が余るようになったのを受け、国内の生産量の少ない塩田や採算のとれない塩田を廃止しようというものです。

沖縄県内の塩田もその対象になっていたようで、その基礎資料として作成されたといわれています。

与根の図面は、縮尺千二百分の一で、塩田の区画や溜池、製塩所などの製塩設備が書き込まれ、そして、これらが一目でわかるように彩色が施されています。

この図面は、今後の民俗編や産業・経済編の編集に無くてはならない貴重な資料の一つといえるでしょう。

村史編さん室 儀間淳一





## 浜下りと瀬長島

むかし、那覇久米村に次良というお百姓さんがいた。ある日、こえおけをてんびん棒でかついで畑にゆく途中、急に大雨が降ってきた。次良は、近くにある大きなガジマルの下で雨やどりをした。あたりには、まったく人の気配が無いのに話し声がする。ふしぎに思つて声のする方を見ると草むらの中に二匹の大きなアカマター(赤いマダラのあるヘビ)が、カマ首をもたげて人間のことで話していた。

びつくりした次良は、その場に腰をぬかして動けなくなつた。二匹のアカマターは、次良には気づいてないらしく、なおも話を続けている。

「久米村に美しい娘がいるんだ。三カ月ほど前から家の人が寝しずまつた夜中に若里主(わかさとぬし)に化けて通つているんだ」

「もしや、その娘におまえの子を身ごもらせた、とか罪なことをしたのではないか」

「実は、そのことで、その娘が何だかふびんに思えてナ」

「かわいそうだと思ふなら、海岸の白浜をはだしで踏めば、アカマターの子は流産する、ということをお教えてやれよ」

「だが、それを話せば、オレが人間ではなく、ヘビだったことがばれて

しまうし……」

次良は、アカマターたちのそんな話を聞いて、目の前が真つ暗になり、体がふるえてきた。そういえば、このごろ、自分の娘の所に、どこかの良家の青年が忍んで来ることに気がついていたが、知らぬふりをしてきた。「まさか、娘がアカマターの子を身ごもつている、娘がヘビの子を産む」と思うと恐ろしくなってきた。だが、白浜を踏めば流産するという話を思い出した。次良は、飛んで家に帰り、すぐに娘を砂辺に連れ出して白浜を踏ませた。すると、娘の体から大きなミミズほどのヘビが三匹もポロポロと落ちた。その日が旧暦の三月三日であった。

県内各地には、似たような話がいくつかあって、これが今日の浜下りの起源(由来)である、と伝えられている。この「浜下り」は、すでに

三百年前から行われていたことがわかる。それは有名な組踊「手水の縁」の台本に、本村の瀬長島で「浜下り」をする情景が、美しく描かれていることでも明らかだ。

手水の縁の作者・平敷屋朝敏(七〇〇一七三四)が生まれてから三百年になる。その顕彰碑や歌碑を建立しようという話題もある。

ところで、今年の旧暦三月三日の「浜下り」は、四月七日(金)に当たる。女性の厄払い(ヤクバレ)と、健康を祈願することを、主旨(目的)とした習俗であるが、行事そのものが薄れがちである。

本村でも四月八日(土)午後三時から五時まで、瀬長島海岸で、ボランティアグループ「ハイサイ」とみぐすく実行委員会」が地元自治会や各団体・機関の協力を得て「浜下り」を開催する。

村民の皆様にも自由に参加されるように呼びかけている。この機会に参加・見学して三月三日行事のルーツや、ご先祖の想い、願いを体験してみたいかがでしょうか。

前村史編さん室長 宜保 喜久





## 九千人台で推移した村人口

—「産めよ殖やせよ」の

人口政策も(戦前)

本村の人口は本土復帰を境に急増、現在では四万九千人余の規模を擁しますが、それまでは常に九千人台で推移してきた純農村でした。

戦前の統計(国勢調査)を見ても、大正九年が九、五〇二人、昭和五年に九、一三八人、昭和十五年は九、四九八人とその推移に大きな変化はみられません。

戦後もその傾向はしばらく続きました。終戦間もない昭和二十一年には、九、三二一人(沖縄民政要覧)、昭和二十五年が九、四一八人(国勢調査)、昭和三十年は、九、七七五人(同)とやはり九千人台が続きます。

これが大きく変化したのは復帰以降のことで、それまで九千人から一万人台へ緩やかな増加を示していたのが、昭和五十年の国勢調査では一気にこれまでの二倍を越える二万四、九八三人となり、以後増加の一途をたどります。

これは商工業の発達や那覇市のベッドタウン化に伴い、続々



と転入者が増えていくといった社会的背景が大きな要因でした。九千人台の時期と比較すると、現在はまさに五倍強の増加となったわけです。

ところで戦前は、国民の人口が兵役など国防につながる重要事項であったため「産めよ殖やせよ」の精神に基づき興味深い人口政策が実践されたことをご存じでしょうか。

統計からも明らかかなように人口動態が極めて緩やかだった当時は、顕著な増加を促すため、結婚に奨励金を支給したり、出産手当を設けるなどといった時期もあったそうです。また十人

以上出産すると厚生大臣からも表彰されました。村内でも戦前、このような多産家庭に対して表彰が行われたこともあったと言われます。

さらに人口の増加には分娩の専門的介助対策が不可欠であるとして、産婆の利用を促進したのも太平洋戦争が始まる以前からでした。まだ民間の分娩手法が幅を利かせている時代で、経験や慣習を頼りに胎児をとりあげ、取り返しのつかない事態も少なくなかったといえます。この産婆の配置も戦時下を背景とした人口政策のあらわれでした。

さて時代は変わり、西暦二千年の今年は五年毎に行われる国勢調査の実施年です。豊見城村の総人口は果たして何人になるのか、熱い注目が寄せられています。

村文化課 大城達宏



## 折口が瀬長島を訪問

大正期の島の様子を記録

今年のゴールデンウィークは好天に恵まれ、県内の行楽地は多くの人で賑わったようです。

村内の瀬長島も多くの人を訪れ、思い思いの休日を過ごしていたようです。

瀬長島は、昔から行楽地であったようで、古くは中国からきた冊封使も訪れています。

時代は下って大正時代には、国文学、民俗学等で有名な折口信夫（おrikuchiしのぶ）も瀬長島を訪れます。

折口信夫は国文学者、民俗学者であると同時に釈迦空（しゃくちょうくう）のペンネームで、歌人、詩人としても活躍した人です。

折口は、大正十（一九二一）年の夏、同十二（一九二三）年の夏、昭和十年（一九三五年）にかけての三度沖繩を訪れ、民間伝承等を調査しています。

折口が瀬長島を訪れたのは、大正十二年の夏のこと、彼が記録した「沖繩探訪記」で確認できます。

少々長くて、読みづらいかもしれませんが、その部分をそのまま紹介しましょう。



折口信夫

「瀬長島では、六月十五日から十六日にかけて、各字及び他村から、一族づゝ組になって、場処々々をきめて、夜ごもりをする。

瀬長に案内してくれた砂屋の話では、おまんちゅうの拝所の鳥居前の岩の間のや、広めな、ぎっしりつまって三四十人も居（お）れる様な処で、若い男女が、あそびをするのだと教へた。おまんちゅうはあまんちゅうであらう。常にこゝへ参るのは、子の欲しい夫婦である。供物（くもつ）は、此処（ここ）に限って、豆腐と塩辛である。勿論（もちろん）供へたあとは、自分でたべる。

これとちよほど反対になって、南側の島裏に一丈（約三メートル）程

の高さの岩の頭近くに、穴が二つ、上のはまるく、下のは横平く、上のは穴のふちが、石ですれて白くなつてゐる。此穴、上のへ石が入れば男、下のへは女といふので、皆が石を投げるのである。

この島には、家が三十軒ほどあつて、よい水が湧く。小祿・豊見城に水がなくなつても、瀬長には水が切れぬ。蘇鉄が沢山（たくさん）あり、割合にはぶが沢山あるといふ。山上には、瀬長城のあとがある。

こゝへは干沙（ひきしお）にかち渡り（徒歩で渡ること）するが二尺（約六六センチ）位の処があるとて、砂屋が砂はこぶ馬車にのせて、前田の平三君と私とを乗せて二三町（約二二〇〜三三〇メートル）の海を渡してくれた。」

この記録によつて、今では見ることのできない、戦前の瀬長島の様子の一旦を垣間見ることが出来ます。

村文化課嘱託 儀間淳一





## 豊見城を訪れた 高等弁務官 ドナルド・ブリス

九州・沖縄サミットで来沖したクリントン米大統領の招聘に名乗りをあげた豊見城村でしたが、残念ながら実現はなりませんでした。

さて、このような外国の要人または為政者が本村を訪れた事例がかつてあったのか、戦後史から興味深い事柄をひも解いてみました。

外国の要人とは多少意味は異なりますが、今からちようど四十年前、米国の施政権下にあった沖縄で権力の最高位にあった一人の米国人が本村を訪れています。第二代高等弁務官ドナルド・P・ブリス（在位一九五八―六一）です。

高等弁務官とは米国統治下にあった当時の沖縄で、



演説するブリス高等弁務官。場所は渡橋名の野菜集荷場（1960年）。

司法、行政、立法の全権力を掌握した最高責任者で、まさに「琉球における大統領」とも言える存在でした。

写真は一九六〇年（昭和三十五年）七月、弁務官資金を投じて完成した風車式かんがい施設の贈呈式出席のため字渡橋名を訪れた時の模様です。

演説をしているのがブリス弁務官、ブリスはこの一年前にも軍向け野菜の産地視察のため字渡橋名に足を運んでいました。

数ある指定産地の中から沖縄園芸連合会（当時）の推せんで渡橋名が視察地に選定されたそう、当時の野菜作りの活況ぶりがうかがえます。ブリス弁務官が渡橋名に最初に訪れた際、弁務官付きの通訳官が「地域で要望などあれば言っていたほうがいい」と話したので字の役員らはすぐさま「かんがい施設への援助」を要請したのでした。その後、全琉でも話題となった風車式の水揚げポンプが弁務官資金で設置される運びとなったのです。

ブリス弁務官二回目の来訪となったかんがい施設贈呈式は、字の野菜集出荷場（現在の座安小学校プール敷地一帯）で催されました。この時ブリス弁務官ら一行は、座安小学校の運動場に直接ヘリコプターで降り、会場入りしたと言われています。

村文化課 大城達宏



# 県下一の長寿 大城ノブさん 62年前の『琉球新報』から

今日十五日は「敬老の日」。

毎年この日には、新百歳になられた方々に対して、内閣総理大臣や沖縄県知事から祝状や記念品が贈られています。

今年は、何人の方が百歳になられたのでしょうか。

さて、今から六十二年前の昭和十三年（一九三八年）五月にも、沖縄県内の満九十歳以上の高齢者が那覇市公会堂で表彰されています。

この中の最高齢は満百二歳で、大城ノブさんという豊見城村宇高入端（現在の饒波）の方でした。

沖縄県の衛生課では表彰式の数日前、大城ノブさんの健康状態や日常生活を知るために、衛生技師ら職員を派遣しています。

この年の五月十五日付の『琉球新報』には、この時のことが本人の写真入りで報じられています。

ノブさんは、天保八（一八三七）年九月十三日生まれで、

当時百二歳。

髪は白髪でちよっぴり鬢（まげ）を結って、腰も曲がってはいるものの、家の中や屋敷内を歩くのは大丈夫で、矍鑠（かくしゃく）としてよく笑い、よく話すユーモアたっぷりな方だったそうです。

県の職員が訪ねた時、ノブさんは敷居際（しきいぎわ）で背中を丸めて縫針（ほろ）を運び檻褌（ぼろ）をつくろっており、これを見た一行は非常に驚いた、と記されています。

衛生技師が聴診器を当てて診察した後、長寿の理由について尋ねると、

「私は若い時から何でも好きで食物も嫌いなものはなく、お医者に見て貰ったこともありません。煙草も好きです。砂糖も好き菓子も何でも

食べます。日常の食事は御飯や芋、お汁も家族も一つで、年寄りには魚より油気のある豚肉が好きです」

と問われるままにしつかりした話ぶりで答えたそうです。

ノブさんは村でも「百歳婆さん」で通り、前年の昭和十二年あたりまでは、屋敷の掃除くらいはひき受けたといいますが。

記事は「一行も百二歳になる老媪（ろうおう）老女のこと」とは思へぬ元気に感じ入った」と最後に結んでいます。

（文化課嘱託 儀間 淳一）





## 疫病からムラを守る祈願

「シマー(シマクサラシ)」

毎年旧暦の十月から十一月にかけて、豊見城村内の各地で「シマー」という行事が行われています。

この行事は沖縄県内各地で行われており、シマクサラシ、またはシマクサラサー、カンカー、シマクーなどと呼ばれています。

主に旧暦の二月頃、一年に一回行われていますが、なかには二、三回、多い所では年に四回も行う地域もあります。

これは疫病(えきびょう)流行病や伝染病のことが部落に入ってくるのを防ぐために行われる年中行事のことで、牛や豚を殺して各戸に分配し、ノロや神人、部落の役員は御嶽(ウタキ)や殿(トウン)といった拝所をまわり、悪疫・魔除けの祈願をします。そして部落の出口、入り口などには左縄を張って牛や豚・山羊などの骨を吊るします。

また家庭ではその血を家の各所に付けたり、木の枝に付けてこれを屋敷の四隅に差したりし

ます。

豊見城村内では現在、字平良、高嶺、

渡嘉敷、伊良波、保

栄茂、翁長で行われ

ていることが確認で

きます。字翁長以外

は旧暦の十月から十

一月にかけて行われ、翁長は二月に行われていますが、ほとんどの字では簡略化され、骨を吊るしたり血の付いた枝を屋敷内に差すことはありません。

しかし、字平良では今でもこの行事が受け継がれています。とは言っても、現在は勝手に家畜を殺すことはできないので、買ってきた牛骨や血を使っています。

平良の「シマー」は、旧暦十月の最後の丙(ひのえ)の日に行われます。この日になると集落内の二カ所に左縄を張り、これに牛の骨を提げ、字平良の神役や役員達はこの二カ所で、部落内に疫病や悪いものが入ってこ



字平良の集落内に張られたワラ縄。縄の数カ所に豚の骨が結ばれている。

ないように祈願します。各家では、血を付けたゲッキツの枝を屋敷の四隅に差します。

この「シマー」は以前はどの地域でも見られた行事ですが、現在では祈願のみ行われるなど簡素化され、なかなか見ることができません。

(文化課囑託 儀間 淳一)



## クリスマスあれこれ 戦後の二期は公休日

クリスマスは言わずと知れたキリストの降誕を祝う世界的行事ですが、沖縄の一般社会に広く浸透してきたのは戦後「アメリカ世」になってからのことでした。

敗戦直後、希望を失い精神的にも虚脱状態にあった沖縄の人々を救うには、宗教心の啓蒙こそ必要であるとして、沖縄最初の中央政治機構であった諮詢会でも、その文化部に宗教係が置かれ、キリスト教および仏教の普及、伝導に力が注がれます。とりわけアメリカ文化の普及に伴い、キリスト教行事は庶民にとっても次第に身近な存在へと変わっていききました。

昭和二十二年になると軍政府指令第五十二号「沖縄の公休日」が公布され、クリスマスは一時公休日に制定されます。しかし、実際には民政府関係者や公務員を主に対象としていたようで、一般にまでは普及されなかった



ようです。

四年後の昭和二十六年、民政府から各市町村長および学校長などに対して祝祭日の実施指導に関する文書が送られています。その文面は、各地域の実情に応じて取り組むようにとの緩やかな内容ですが、実施にあたっての参考資料として、クリスマス行事は次のように述べられています。

「(中略)二十四日の夕はクリスマスイブとして教会や個人の家でもクリスマスツリーを立てて祝宴を開く。友人知人の間に

クリスマスカードやプレゼントの贈答が行われる。我々はキリスト教行事を進んで理解しよう。行事(として)部落ではクリスマス演芸を行う」

(「琉球史料・教育編」より)

これらが、各市町村や学校現場でどのように実施奨励されたか記録は残っていませんが、当時の社会事情の一端を垣間見る興味深い動きだと言えるでしょう。世相は戦後の貧しさが未だ影を引きずっていた時代で、クリスマスが近づくと、お菓子や玩具などのプレゼント欲しさにわかクリスマスチャンへと変身した子ども達も多く見られました。

さて村内におけるエピソードとしては、上田小学校において、昭和三十年代後半に行われたというクリスマス行事が最もスケールが大きくアメリカ的です。冬休みを目前にしたその日、ヘリコプターがなんと学校の運動場へ着陸、プレゼントを抱えたアメリカ人扮するサンタが登場し、子ども達を大喜びさせたそうです。この出来事を覚えていた四十歳代の方々、けっこう多いのではないのでしょうか。

(文化課 大城達宏)



## 豊見城村内を 走った軌道馬車

都市モノレールの橋脚や駅舎が街のあちらこちらに姿を現し始めると、開通への期待もより現実味を帯びてきました。新たな交通機関の登場は県民の多くが注目しているようです。

沖縄には戦前まで、沖縄県営鉄道（軽便）が大正三年の創業以来、那覇駅を起点に与那原線、嘉手納線、糸満線、海陸連絡線（那覇駅―那覇港）の四路線を開設し県民に利用されていましたが、それらは豊見城村内からの直接の通過はなかったようです。

村内の地名が唯一、駅名として使われたものに与那原線「真玉橋駅」（※糸満線も同駅を通過）がありますが、その位置も、実際は国場川を挟んで真玉橋集落の対岸「橋のチビ」と呼ばれた真和志村（当時）側にあつたといえます。このように鉄道との関わりが決して濃密とは言えなかつた本村にあつて、注目したい鉄軌道が那覇―糸満間に軌道馬車を走らせた「糸満馬車軌道株式会社」です。

この会社は、尚順男爵ら当時



糸満街道を走っていた軌道馬車（『図説・沖縄の鉄道』より）

六十分、片道運賃十二銭で運行していました。乗客は那覇への商用客が多く、糸満の魚売りをはじめ、兼城、豊見城など沿線の住民、さらに糸満以南の喜屋武、摩文仁、真壁辺りの住民の利用も多かつたようです。

地覇から翁長までの村内の区間は広大な志茂田平野を通り抜ける見晴らしの利く平坦な地形です。付近には伊良波、座安など停車場が一応あるものの、水田や畑の中をテクテクと進む軌道馬車に、乗客はどこからでも声をかけ乗れるというのどかなものだったそうです。

しかし、昭和十年になると乗客数の減少により軌道馬車は運行を停止、県道上に放置されたレールもいつしか通行の邪魔になるということで、地元民の手により撤去されたといえます。

糸満馬車軌道の廃止については、軽便糸満線開通による影響も指摘されていますが、実際には馬車軌道と軽便とはコースがまったく違うため競合はほとんどなく、むしろ同一路線上に普及が台頭してきた自動車やバスの登場が大きな原因だったと言われています。交通機関の移り変わりはまさに時代の流れを映しだしているようです。

（『図説 沖縄の鉄道（加田芳英著）参考

文化課 大城達宏

の資本家が設立した私企業で、大正八年、まず那覇垣花―豊見城村地覇（現在の名嘉地）間に運行を開業、糸満街道（現在の国道三三一号線）を利用して翌九年にはさらに終点を糸満まで延ばし全線約九・三kmに営業を始めています。村内には前述の地覇のほか、伊良波、座安、保栄茂、翁長にそれぞれ停車場があつたと記録されています。

軌道馬車は、レール上の貨客車両を馬で引っ張る方式で、当時、垣花―糸満間を所要四十

# 舟を漕ぐ 農民

〜王府時代の  
農民の意外な一面〜

かつて沖縄は、中国と長年にわたり貿易が行われていたことはよく知られています。

しかし、この貿易のために多くの民衆が関わっていたことはあまり知られていません。豊見城間切の人々もその中の一人でした。

中国へ派遣する船のことを唐船（中国へ行く船を渡唐船・帰ってくる船を帰唐船）といいます。この唐船は、冬の北風を利用して中国へ渡り、夏の南風を利用して旧暦の五月、六月ごろに沖縄へ帰ってきました。

そのため、三月から四月にかけて、首里王府は帰港する唐船の受け入れ準備に追われていました。その準備の一つに各間切への舟の手配がありました。

唐船が到着すると王府の役人は、海上から船を監視したり、積み荷の取り扱いについて指示を出すことになっていました。その時に役人が乗る小舟の漕ぎ手は、那覇港に近い小祿や豊見

城間切から出させていました。

一八四四（道光二四）年の「卯秋うしゅう走接貢船そうせつこうせん帰帆改日きはんかいにち記」という史料によると、唐船が見えたら、二艘組にしたくり舟七艘を準備して、一艘に

つき間切役人一人と漕ぎ手六人ずつ乗って沖へ漕ぎ出すようになります。また、これとは別に唐船の出港や帰港の時に曳航する舟と漕ぎ手も豊見城から出していました。

当時の船は風が頼りであったため、出帆の時は風のある沖合まで曳航したり、帰帆の際、那覇以外の海岸に漂着した場合などは、そこから那覇港まで曳航することもたびたびありました。

例えば、前記の一八四四年に帰帆した唐船は、本部間切に漂



進貢船の図（沖縄県立博物館所蔵）

着、沖縄本島西海岸に面する各間切にある小舟すべてが駆り出され、約三日かけて那覇港に曳航しています。その中にはもちろん豊見城間切も含まれていました。

これらの舟を漕いでいたのは農民がほとんどでした。

これまで農民というと、舟に乗る機会も少ないと思われがちでした。しかし、彼らが舟を漕いでいる姿は、農民の意外な一面を垣間見る興味深い事例ではないでしょうか。

（文化課嘱託 儀間淳一）

交通機関が発達した現代は、予算と時間の都合さえつければほぼ世界中どこへでも行けるようになりました。ゴールデンウィークを利用して、旅行を楽しまれた方も多いことでしょう。

しかし、かつて沖縄では国外や県外へ旅立つ人々の目的の多くは、生活の糧を得るための移民や出稼ぎでした。

豊見城の移民は、一八九九（明治三二）年に宇高安の長嶺保榮氏が北米・合衆国へ移民したのをはじめとしています。それ以来、ニューカレドニア、メキシコ、フィリピンなどにも多くの移民を送り出しました。

特にフィリピンへは、一九〇六（明治三九）年に宇渡嘉敷の赤嶺亀次郎氏とその弟らが渡り、その後も多くの人が移民しました。一九二七（昭和二）年には、ミンダナオ島ダバオに三〇五人の村人が在住し、主に麻の栽培に従事しました。

南米へは一九〇八（明治四一）年にペルー、ブラジルへ渡航して以降、豊見城からの移民が見られるようになりました。

また、日本の占領地であった朝鮮半島や台湾、第一次大戦後に日本の信託統治領となった旧南洋群島にも多くの人々が移り住みました。

そのほか、戦前期には県外へ出稼ぎに行った人も多く、若い女性が紡績工場の女工として働いた例は多く聞かれます。

### 市史余話

## 海を渡った豊見城の人々

～移民・出稼ぎの調査を開始～

▶ 戦前、フィリピンへ移民した字豊見城・具志保太郎氏。  
（右から2人目、着帽の男性）麻の栽培のようす。  
（『とみぐすく写真帳』より）



また一九四一（昭和一六）年の八重山・川原への移民は本村の特徴としてあげられるでしょう。

戦後の八重山開拓は、字保榮・田頭・名嘉地出身者が多く自由移民で渡り、琉球政府計画の移民では、ポリビア行きに加わった人もいました。かつて、故郷を離れて国外や県外へと旅立った豊見城の人々は、成功を収めるため、あるいは生活を維持するため、あるいは異郷の地で気候や生活習慣、言葉の違いなどに悩まされながらも懸命に働き、やがてその地に定住したり、あるいは失意のうちに帰郷したりと、各地でさまざまな歴史を刻みました。名所観光にシヨッピング、名物料理食べ放題の現代の旅行からは想像できない、固い決意の上での命がけの旅立ちだったことでしょう。

（市史係 稲福政育）

注・二〇〇四年六月号発行以後の移民調査により、内容を一部改訂しました。

現在、市史第4巻「移民編」の調査を行っています。移民編は、近代以降の豊見城の社会的・経済的背景や人々の生活を移民や出稼ぎをおして明らかにすることを目的としています。

移民・出稼ぎの経験をお持ちの方、また情報をご存知の方はぜひご一報ください。あわせて、移民や出稼ぎに関する書類や写真などの資料をお持ちの方のご連絡もお待ちしております。

教育委員会 文化課 市史係  
☎ 856・3671

石垣島は土地が豊かな上に県内の他地域に比べ人口密度も低いことから、王府時代以来幾度か移住事業が実施されました。しかし台風や干ばつ、マラリアなどにより、大きな成果を挙げるには至りませんでした。

そのような中、開拓移住の成功例のひとつとして知られる石垣市宇大浜の川原地区は、豊見城から移住した人々が中心となって築いたものです。

川原への移住は、第二次大戦前、沖縄県振興計画の一環として行われたことに始まります。1941(昭和16)年7月、八重山開拓移住事業の計画をいち早く聞きつけた当時の豊見城村長・上原恒雄氏は字名嘉地出身の上原重秀、上原博、長嶺政徳の3氏を先遣隊として川原へ派遣しました。このうち、フィリピン移民などで豊富な経験のあった上原重秀氏はこの地が農業に適していると確信し、親類などにも積極的に移住をすすめました。そしてこの年、豊見城から7家族、石垣島内から4家族が川原に入りました。

川原に移住した人々は、まず手始めに食料確保のための開墾や住宅建築の共同作業を行い、生活の基盤づくりを努めました。その後、甘藷(かんしょ)や陸稲(りくとう)の栽培を中心に農業経営を安定させ、これに伴い川原での暮らしは次第に充実していきました。戦時中はマラリアの発病者も出ましたが、集落の結束で犠牲を最小限に食い止めました。

第二次大戦後は、食糧事情の好転により甘藷の価格が下落し始めたため、主な作物をサトウキビに切り替え、1948(昭和23)年には八重山全郡に先がけ製糖組合を組織し、工場を設立しました。



川原への最初の移住者のひとり、上原重秀氏の住宅前で。奥に立つ着帽の男性が上原氏。(昭和26年) (『とみぐすく写真帳』より)

## 市史余話 石垣島・川原への開拓移住

また、字保栄茂出身の大城満栄氏がいち早く軌道に乗せたパイン栽培は昭和20年代後半から30年頃にかけて川原一帯でも盛んになり、サトウキビと並ぶ換金作物パインによりさらに経済的に潤うようになりました。この時期、字保栄茂から多くの人々が家族で川原へ移住しています。

入植開始から60年を過ぎた現在でも、川原の住民の多くは豊見城ゆかりの人々で占められ、本市との関係はいまなお深いものがあります。

### 資料の寄贈

このほど、フィリピン移民・赤嶺加那氏(前又新門小)に関する資料が寄贈されました。

赤嶺加那氏は豊見城初のフィリピン移民として知られる字渡嘉敷の赤嶺兄弟の次男で「バナワン赤嶺兄弟拓殖株式会社」を興し、兄弟でマニラ麻栽培農園を経営しました。寄贈資料は、1942と1943年ごろの納税関係書類や領収書、軍票などで、当時のフィリピン移民の生活の一端を知る上で貴重なものです。

寄贈者の赤嶺夫保(せこやす)氏(字上田在)は加那氏の長男で、ご自身も16歳までミンダナオ島で生活されました。現在まで貴重な資料を大切に保管し、今回市史「移民編」の趣旨をご理解の上、寄贈いただきましたことに深く感謝申し上げます。

(市史係 稲福政育)

現在、市史「移民編」の調査を行っています。移民・出稼ぎの経験や情報をお持ちの方はぜひひと報ください。あわせて、移民・出稼ぎに関する書類や写真などの資料をお持ちの方からのご連絡もお待ちしております。

### お問い合わせ

教育委員会文化課 ☎ 85613671



---

## 豊見城市史だより 第12号

2015（平成27）年3月31日

編集・発行

豊見城市教育委員会生涯学習部文化課

〒901-0232 豊見城市字伊良波392番地

電話（098）856-3671

FAX（098）856-1215

印刷 第一印刷株式会社

---

### 文化課スタッフ

課長 大城達宏

係長 与那嶺豊

主事 島袋幸司・宮城良真

臨時 大城博美

嘱託 赤嶺みゆき・親川裕子

鳥山やよい・當銘涼子

大城友理華